

基本計画書

基本計画										
事項		記入欄							備考	
計画の区分		学部の設置								
フリガナ 設置者		カッコウホクシン ハマナヤマテカクイン 学校法人 濱名山手学院								
フリガナ 大学の名称		カンサイコクサイダイガク 関西国際大学								
大学本部の位置		兵庫県三木市志染町青山1丁目18番								
大学の目的		教育基本法、学校教育法、及び学校法人濱名山手学院の教育ミッションに基づき、グローバルな視野に立った教養と専門的知識・技術を修得し、安全な社会やコミュニティづくりに向けて総合的に活用できる人材を育成することを目的とする。								
新設学部等の目的		グローバル社会や地域社会が直面する諸問題に関して、社会学、経営学、政治・経済などの科学的視点から課題発見・解決する能力、語学力を含む高度なコミュニケーション能力、“Diversity, Equity and Inclusion”（DE&I：多様性、公平性、包括性）の視点をもって、グローバル社会に貢献する人材を育成する。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地	
	グローバル学部	年	人	年次人	人			年 月 第 年次		
	グローバル学科	4	125	3年次 20	540	学士 (国際学)	文学関係	令和7年4月 第1年次	神戸市中央区諏訪山町3番1	
	計		125	3年次 20	540			令和9年4月 第3年次		
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）		国際コミュニケーション学部（廃止） グローバルコミュニケーション学科（△75） 観光学科（△80） ※令和7年4月学生募集停止 経営学部 経営学科〔定員増〕（25）（令和7年4月） 教育学部 教育福祉学科〔定員減（△60）〕（令和7年4月） 社会学部 社会学科〔定員減（△50）〕（令和7年4月）								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
		講義	演習	実験・実習	計					
	グローバル学部 グローバル学科	74 科目		54 科目		11 科目		139 科目		126 単位
学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)		
		教授	准教授	講師	助教	計				
新設	グローバル学部グローバル学科		11 人 (11)	3 人 (3)	0 人 (0)	0 人 (0)	14 人 (14)	0 人 (0)	41 人 (41)	大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 11人
	設	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	11 (11)			
		b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
		小計（a～b）	8 (8)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	11 (11)			
		c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
		d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	3 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)			
		計（a～d）	11 (11)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	14 (14)			
分	計	11 (11)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	41 (41)		

既	教育学部教育福祉学科						9 (9)	10 (10)	5 (5)	0 (0)	24 (24)	0 (0)	37 (37)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 9人
	a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの					9 (9)	10 (10)	5 (5)	0 (0)	24 (24)			
	b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）						9 (9)	10 (10)	5 (5)	0 (0)	24 (24)			
	c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）						9 (9)	10 (10)	5 (5)	0 (0)	24 (24)			
	計						9 (9)	10 (10)	5 (5)	0 (0)	24 (24)	0 (0)	37 (37)	
	心理学部心理学科						9 (9)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	10 (10)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 8人
	a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの					9 (9)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	16 (16)			
b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
小計（a～b）						9 (9)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	16 (16)				
c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）						9 (9)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	16 (16)				
計						9 (9)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	10 (10)		
設	経営学部経営学科						14 (14)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	7 (7)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 11人
	a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの					13 (13)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	20 (20)			
	b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）						13 (13)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	20 (20)			
	c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）					1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)			
	計（a～d）						14 (14)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	20 (20)			
	計						14 (14)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	7 (7)	
	保健医療学部看護学科						9 (9)	8 (8)	8 (8)	4 (4)	29 (29)	0 (0)	17 (17)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 9人
	a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの					9 (9)	8 (8)	8 (8)	4 (4)	29 (29)			
b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
小計（a～b）						9 (9)	8 (8)	8 (8)	4 (4)	29 (29)				
c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）						9 (9)	8 (8)	8 (8)	4 (4)	29 (29)				
計						9 (9)	8 (8)	8 (8)	4 (4)	29 (29)	0 (0)	17 (17)		
分														

既設分	社会学部社会学科			7 (7)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	8 (8)	大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 11人		
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	15 (15)							
		b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			0 (0)				
		小計（a～b）	7 (7)	8 (8)	0 (0)	0 (0)			15 (15)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)							
		d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
		計（a～d）	7 (7)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	15 (15)						
	計			7 (7)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	15 (15)			0 (0)	8 (8)	
	合 計			48 (48)	35 (35)	17 (17)	4 (4)	104 (104)	0 (0)	210 (210)			
	職 種			専 属			その他			計			
事 務 職 員			72人 (72)			62人 (62)			134人 (134)				
技 術 職 員			0 (0)			0 (0)			0 (0)				
図 書 館 職 員			3 (3)			12 (12)			15 (15)				
そ の 他 の 職 員			0 (0)			0 (0)			0 (0)				
指 導 補 助 者			0 (0)			0 (0)			0 (0)				
計			75 (75)			74 (74)			149 (149)				
校地等	区 分		専 用		共 用		共用する他の学校等の専用		計		大学全体		
	校 舎 敷 地		71,777 m ²		33,820 m ²		0 m ²		105,597 m ²				
	そ の 他		23,552 m ²		0 m ²		0 m ²		23,552 m ²				
	合 計		95,329 m ²		33,820 m ²		0 m ²		129,149 m ²				
校 舎			専 用		共 用		共用する他の学校等の専用		計		大学全体		
			55,224 m ² (55,224 m ²)		0 m ² (0 m ²)		0 m ² (0 m ²)		55,224 m ² (55,224 m ²)				
教 室 ・ 教 員 研 究 室			教 室		35 室		教 員 研 究 室		14 室				
図書・設備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕冊		電子図書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕種		電子ジャーナル 〔うち外国書〕		機械・器具 点	標本 点	大学全体の数
	グローバル学部 グローバル学科		400,000〔32,585〕 (325,926〔31,684〕)		6,000〔3,585〕 (5,450〔3,582〕)		7,100〔2,405〕 (6,914〔2,358〕)		3,800〔2,000〕 (3,621〔1,954〕)		6,520 (6,520)	51 (51)	
	計		400,000〔32,585〕 (325,926〔31,684〕)		6,000〔3,585〕 (5,450〔3,582〕)		7,100〔2,405〕 (6,914〔2,358〕)		3,800〔2,000〕 (3,621〔1,954〕)		6,520 (6,520)	51 (51)	
	スポーツ施設等		スポーツ施設 9,837 m ²		講堂 394 m ²		厚生補導施設 976 m ²						
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
		教員1人当り研究費等		200,000	200,000	200,000	200,000						
		共同研究費等		3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000						
		図 書 購 入 費	26,490,500	27,000,000	27,000,000	27,000,000	27,000,000						
		設 備 購 入 費	5,000,000	5,000,000	5,000,000	5,000,000	5,000,000						
	学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次					
			1,459千円	1,159千円	1,159千円	1,159千円	千円	千円					
	学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入、経常費補助金などを運営費に充当する。									

既設大学等の状況	大 学 等 の 名 称	関西国際大学								
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所 在 地	
		年	人	年次人	人		倍			
	教育学部教育福祉学科	4	150	－	600	学士（教育福祉学）	0.61	平成19年度	尼崎市潮江1丁目3番23	
	経営学部経営学科	4	175	3年次20	740	学士（経営学）	0.98	令和元年度	兵庫県三木市志染町青山1-18	
	保健医療学部看護学科	4	100	－	400	学士（看護学）	0.93	平成25年度		
	社会学部社会学科	4	100	－	400	学士（学術）	0.56	令和3年度		
	心理学部心理学科	4	125	－	500	学士（行動科学）	1.02	平成19年度		
	国際コミュニケーション学部						0.63		神戸市中央区諏訪山町3番1	
	グローバルコミュニケーション学科	4	75	－	300	学士（英語学）	0.7	令和元年度		
	観光学科	4	80	－	320	学士（観光学）	0.58	令和3年度		
附属施設の概要										

- (注)
- 1 共同学科の認可の申請及び届出の場合，「計画の区分」，「新設学部等の目的」，「新設学部等の概要」，「教育課程」及び「新設分」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
 - 2 「新設分」及び「既設分」の備考の「大学設置基準別表第一イ」については，専門職大学にあつては「専門職大学設置基準別表第一イ」、短期大学にあつては「短期大学設置基準別表第一イ」，専門職短期大学にあつては「専門職短期大学設置基準別表第一イ」にそれぞれ読み替えて作成すること。
 - 3 「既設分」については，共同学科等に係る数を除いたものとする。
 - 4 私立の大学の学部又は短期大学の学科の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は，「教育課程」，「教室・教員研究室」，「図書・設備」及び「スポーツ施設等」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
 - 5 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は，「教育課程」，「校地等」，「校舎」，「教室・教員研究室」，「図書・設備」，「スポーツ施設等」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
 - 6 「教育課程」の欄の「実験・実習」には，実技も含むこと。
 - 7 空欄には，「－」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要																			
(グローバル学部グローバル学科)																			
科目区分			授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)		
専門教育科目	基礎科目	英語	英文法と英音法	1春	○	1					○		1						
			英語スピーチで語る現代世界Ⅰ	1春	○	2					○		1						
			英語スピーチで語る現代世界Ⅱ	1秋	○	2					○		2						
			英語スピーチで語る現代世界Ⅲ	2春	○	2					○		2						
			英語ディベートで知る現代世界Ⅰ	1春	○	2					○		1						
			英語ディベートで知る現代世界Ⅱ	1秋	○	2					○		2						
			英語ディベートで知る現代世界Ⅲ	2春	○	2					○		2						
			英語で読む世界のニュースⅠ	2春			2				○		2						
			英語で読む世界のニュースⅡ	2秋			2				○		2						
		グローバル	神戸の社会と文化	1春	○	2				○				1					
			グローバル化と社会	1春	○	2				○				1					
			グローバル概論	1春	○	2				○			1						
			多文化共生論	1秋	○	2				○			1						
			マーケティング	1秋	○	2				○			1						
			グローバルビジネス論	2春	○	2				○			1						
			世界から見た日本	2春	○	2				○							1		
			マーケットリサーチ	2春	○	2				○			1						
			総合演習	グローバル工房プロジェクトⅠ	2春	○	2					○		9	3				
	グローバル工房プロジェクトⅡ	2秋		○	2					○		9	3						
	グローバル工房プロジェクトⅢ	3春		○	4					○		9	3						
	グローバル工房プロジェクトⅣ	3秋		○	4					○		9	3						
	卒業研究	4春・秋		○	4					○		8	3						
	基幹科目	共通	国際関係	2春			2			○								1	
			コーポレート・ファイナンス	2春			2			○			1						
			グローバル化とwell-being	2春			2			○			1						
			公共政策論	2春			2			○				1					
			統計学	2秋			2			○								1	
			異文化コミュニケーション	2秋			2			○			1						
			ソーシャルビジネス論	2秋			2			○				1					
			地域社会とまちづくり	2秋			2			○				1					
			ベンチャーエコシステム	2秋			2			○			1						
			組織マネジメント論	2秋			2			○			1						
		国際ビジネス	デジタルマーケティング	3秋			2			○			1						
			商品企画論	3秋			2			○								1	
			ビジネスプレゼンテーション	2春			2			○								1	
			消費者心理学	3秋			2			○								1	
ビジネスモデル・デザイン			3春			2			○			1							
eコマース			4春			2			○			1							
日本語・日本文化			日本酒・日本食(和食文化論)	2秋			2			○			1						
			日本語の構造Ⅰ	2春			2			○			1						
	日本語の構造Ⅱ	2秋			2			○			1								
	Jポップナウ	2秋			2			○								1			
	日本文学	3春			2			○								1			
	通訳入門	3夏			2			○								1	集中		
	日本語教育事情	3春			2			○			1								
	日本語コミュニケーション	2秋			2			○								1			
	日本語教授法	3春			2			○								1			
	日本語教育の実践と評価	3秋			2			○								1			
観光まちづくり	グローバルツーリズム論	2秋			2			○				1							
	ホスピタリティマネジメント	2秋			2			○								1			
	観光政策論	4春			2			○				1							
	アミューズメントパーク論	2秋			2			○			1								
	文化遺産マネジメント	3秋			2			○				1							
	市民参加論	4春			2			○			1								
	交通インフラと社会	3春			2			○								1			
	MICE・IR概論	3秋			2			○			1								

教育課程等の概要																				
(グローバル学部グローバル学科)																				
科目区分		授業科目の名称	配当 年次	主要 授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考			
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹 (助手を除く) (教員以外の教員)				
専門 教育科目	展開 科目	英語学	英語音声学	2春			2		○							1				
			英語学	1春			2		○							1				
			英米文学概論	1夏			2		○							1	集中			
			英語科教育法Ⅰ	2春			2		○							1				
			英語科教育法Ⅱ	2秋			2		○							1				
			英語科教育法Ⅲ	3春			2		○							1				
			英語科教育法Ⅳ	3秋			2		○							1				
			小計(63科目)	-	-	45	86	0	-			11	3	0	0	0	15			
基盤 教育科目	Communication	コミュニケーション科目	学習技術	1春		1				○		2	3							
			ICTリテラシー	1春		2					○		3	1						
			生涯スポーツⅠ	1春・夏			1					○						1		
			生涯スポーツⅡ	1秋・冬			1					○						1		
		第1外国語 (英語)	英語の論理Ⅰ	1春			1				○		1							
			英語の論理Ⅱ	1秋			1				○		1							
			英語コミュニケーションⅠ	1春			1				○							1		
			英語コミュニケーションⅡ	1秋			1				○							1		
			英語コミュニケーションⅢ	2春			1				○							1		
			TOEICストラテジーⅠ	1秋			1				○		1							
			TOEICストラテジーⅡ	2春			1				○		1							
			上級英語コミュニケーションⅠ	2春			1				○							1		
			上級英語コミュニケーションⅡ	2秋			1				○							1		
			TOEFLストラテジー	2春			1				○		1							
		IELTSストラテジー	2春			1				○		1								
		第2外国語	中国語Ⅰ	1春			2				○							1		
			中国語Ⅱ	1秋			2				○							1		
			韓国・朝鮮語Ⅰ	1春			2				○							1		
			韓国・朝鮮語Ⅱ	1秋			2				○							1		
			ベトナム語	1春			1				○							1		
			マレー語	1春			1				○							1		
			インドネシア語	1春			1				○							1		
		日本語 (留学生対象)	日本語Ⅰ	1春・秋			2				○							1		
			日本語Ⅱ	1春・秋			2				○							1		
			日本語Ⅲ	1春・秋			2				○							1		
			日本語Ⅳ	1春・秋			2				○							1		
			日本語Ⅴ	1春・秋			2				○							1		
			アカデミック日本語Ⅰ	2春			1				○							1		
			アカデミック日本語Ⅱ	2秋			1				○							1		
			日本語ライティングⅠ	2春			1				○							1		
			日本語ライティングⅡ	2秋			1				○							1		
			ビジネス日本語	2春			1				○			1						
		専門日本語	2秋			1				○			1							
		コンスキル科目	リーダーシップ演習	1冬			1				○							1	集中	
			プログラミング入門	2秋			2				○							1		
			画像・動画編集	2秋			2				○							1		
			ITスキル基礎	2秋			2				○							1		
		Consideration	K U I S S コア科目	評価と実践Ⅰ	1～2		1					○		1						
				評価と実践Ⅱ	3～4		1					○		1						
				人間学Ⅰ	1春		2				○			1					2	オムニバス
人間学Ⅱ	1秋				2				○			1					2	オムニバス		
初年次セミナー	1春				1					○		3	3							
基礎演習	1秋				1					○		3	3							
仕事とキャリア形成Ⅰ	2春				2				○			2	1							
仕事とキャリア形成Ⅱ	2秋				2				○			2	1							
仕事とキャリア形成Ⅲ	3夏					2			○			2						集中		
リサーチ入門	1秋				1					○			2							
データサイエンス	1秋				2				○								1			

教育課程等の概要																				
科目区分			授業科目の名称	配当 年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考		
						必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 の教員 (助手を除く)			
基盤教育科目	Consideration	リベラル アーツ 科目	日本文化論	1春・秋			2		○								1			
			日本国憲法	1春・秋			2		○								1			
			人権と法	1春・秋			2		○								1			
			宗教と共生社会	1春・秋			2		○								1			
			倫理と社会	1春・秋			2		○								1			
			近現代の歴史	1春・秋			2		○								1			
			ジェンダーと多様性	1春・秋			2		○								1			
			国際社会と政治	1春・秋			2		○								1			
			自然と災害	1春・秋			2		○								1			
			教育と人間形成	1春・秋			2		○								1			
			SDGsと持続可能社会	1春・秋			2		○								1			
			AIと次世代社会	1春・秋			2		○								1			
			食と健康	1春・秋			2		○								1			
			地域防災減災論	2冬			2		○								1	集中		
			ボランティア論	1春・秋			2		○								1			
			グローバルヘルス	1冬			2		○								1	集中		
			日本事情(日本社会)	1春・秋			2		○								1			
			地域研究(北米圏)	1春・秋			2		○								1			
			地域研究(アジア圏)	1春・秋			2		○								1			
	Commitment	K U I S s コ ミ ツ メ ン ト 科 目	コーオプ・プログラムⅠ	1冬			1				○							1	集中	
			コーオプ・プログラムⅡ	2夏			2					○							1	集中
			コーオプ・プログラムⅢ	2夏			3					○							1	集中
			サービ斯拉ーニングⅠ	2春			1					○		1						
			サービ斯拉ーニングⅡ	2春			2					○							1	
			グローバルスタディⅠ	1夏			1					○	1							
			グローバルスタディⅡ	1夏			2					○							1	集中
			グローバルスタディⅢ	1夏			3					○							1	集中
			グローバルスタディⅣ	1夏			4					○							1	集中
			小計(76科目)	－	－	18	106	0			－		7	3	0	0	0		36	
合計(139科目)			－	－	63	192	0			－		11	3	0	0	0		51		
学位又は称号		学士(国際学)		学位又は学科の分野						文学関係										
卒業要件及び履修方法										授業期間等										
専門教育科目から必修45単位、「共通」から8単位以上、「国際ビジネス」「日本語・日本文化」「観光まちづくり」から14単位以上の計67単位以上を履修。基盤教育科目から必修18単位、「コミュニケーション科目」から3単位以上、「第1外国語」及び「第2外国語」から7単位以上(第1外国語5単位以上含む)、「コミュニケーションスキル科目」から1単位以上、「KUISsコア科目」から15単位以上、「リベラルアーツ科目」から6単位以上、「KUISsコミットメント科目」から3単位の計53単位以上を履修した上で、卒業要件単位である126単位を修得する。										1学年の学期区分				4学期 春学期 夏学期(集中) 秋学期 冬学期(集中)						
										1学期の授業期間				15週 (夏及び冬学期は集中期間)						
										1時限の授業時間				90分						

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分		授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	基礎 科目	英語	英文法と英音法	○	大学生が使う英語は、知識人としての英語、教養人としての英語でなければならない。それは具体的には、文法的にも音法的にも折り目正しい英語である。この授業では、高校までに学んだ受験文法（規範文法）を記述文法の立場から総整理し、その構造的理解を図ると同時に、音声としての英語を運用する際のルールである英音法を学び、知識人としての英語の基礎を構築する。	
			英語スピーチで語る現代世界Ⅰ	○	「英語の論理Ⅰ・Ⅱ」で習得した英語的思考（三角ロジック）をもとに、英語ディベートの基本を学ぶ。WUDC（学生英語ディベート世界大会）に準じて、英国議会式のディベートを採用、比較的身近な時事問題に関する準備型（リサーチ型）のディベートを実践し、英語力のみならず、説得力を高める情報収集スキルや複眼的な見方、より深いクリティカル・シンキングを養う。	
			英語スピーチで語る現代世界Ⅱ	○	WUDC（学生英語ディベート世界大会）に準じて、英国議会式のディベートを採用、現代のグローバル社会が抱える諸問題について、準備型（リサーチ型）のディベートを実践する。正解が一つではない問題に対して、いかに対立する意見の中から答えを導き出すのか、グローバルシチズンの知的武装としての高度なディベートの能力を身につける。	
			英語スピーチで語る現代世界Ⅲ	○	「英語ディベートで知る現代世界Ⅰ・Ⅱ」では、入念な事前の情報収集に基づく準備型（リサーチ型）のディベートを行うが、この授業では、WUDC（学生英語ディベート世界大会）に準じながら、世界の時事問題をテーマに即興型のディベートを実践する。優秀な学生はチームを編成し、WUDCへの出場を目指す。	
			英語ディベートで知る現代世界Ⅰ	○	「英語の論理Ⅰ」で学ぶ英語的思考（三角ロジック）をもとに、英語によるパブリック・スピーチを実践する。ジョン・F・ケネディやマーティン・ルーサー・キングJr.のスピーチなど、古今の名スピーチの暗誦を通して、アイコンタクト、デリバリー、呼気による発声など、パブリック・スピーチの基礎的な技術を習得する。	
			英語ディベートで知る現代世界Ⅱ	○	「英語ディベートで知る現代世界Ⅱ」で扱うテーマと連関させながら、より複雑な社会問題について、英語によるパブリック・スピーチを実践する。それぞれのテーマに3分～5分程度のやや長いスピーチを準備、暗誦し、プレゼンテーションを行う。国内の各種英語スピーチ大会への出場も視野に置く。	
			英語ディベートで知る現代世界Ⅲ	○	この授業では、即興型のパブリック・スピーチを行う。テーマは「英語ディベートで知る現代世界Ⅲ」で扱う内容と連関させるが、形式は英検準1級および1級の二次試験（面接）に準じ、その場で与えられたテーマについて、1分間の準備ののち、2分間のスピーチを行う。英検準1級・1級の二次対策も兼ね、それらの問題も織り交ぜる。	
			英語で読む世界のニュースⅠ		世界最大の英文週刊ニュース誌TIMEを素材に、現在進行形で起こっている最新の世界の出来事について学ぶ。TIMEは世界最高峰の時事英語とも言われるが、その難易度の高さから、最初は指導者に読み方の手ほどきを受けるのが望ましく、この授業がその役割を果たすだろう。この授業では、TIMEの中でも比較的読みやすいアジアのニュースを中心に、同地域が抱える諸問題を分析、自分自身の意見が持てるようになることを目指す。	
			英語で読む世界のニュースⅡ		この授業では、とくにアメリカに関する記事を中心にTIMEを読む。今日、アメリカを考えることは文明世界の全体を考えることに通じる。それほどアメリカ的生活様式や思考様式の浸透力は強く、とりわけ20世紀以降の世界の主要地域における伝統文化に加えられたその革命的影響力は大きかった。アメリカの現在と未来を考えながら、アジアの現在と未来、日本の現在と未来について考える。	

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分			授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基礎 科目	グ ロ ー バ ル	神戸の社会と文化	○	神戸の社会は多様な人々によって培われてきた。いまでも街のなかには多様な文化が散見される。多様性と文化は神戸の街を紐解くためのキーワードである。ではなぜ、神戸という街には多様性が花開くことになったのだろうか。そして多様性は時にマジョリティとマイノリティといった社会問題を生じさせている。本講義では、神戸の歴史・社会を軸とし、特にマイノリティと神戸の関係を考える。	
			グローバル化と社会	○	グローバル化の語源はグローブという言葉である。日本という国で生活していたとしても諸外国との関係抜きに成り立つわけではない。私たちの日常生活をみても、世界中のヒト・モノ・カネ・情報が行き交っている。つまり私たちは国家を超えた「関係」に包み込まれているのだろうか。こうしたグローバル化は私たちの社会にいかなる影響を与えているのだろうか。本講義ではグローバル化と社会の関係を社会学の観点から検討する。	
			グローバル概論	○	グローバル化が進み、国境を越えて移動する人々（移民、留学生、難民など）が増大し、多国籍で展開されるビジネスも拡大している。本講義では、世界で起こっている紛争、自然災害、環境破壊などにかかわるトピックを取り上げ、階層、労働、福祉、教育、アイデンティティ、文化などの社会事象を時代の流れのなかでどう読み解くか、いま私たちが暮らしている日本社会の変容をどうとらえるか、という視点から考察する。	
			多文化共生論	○	日本における人口減少が加速度的に進む中、在留外国人人口は過去10年で39.8%も増加している。国籍や民族の異なる人々が共に生きる多文化共生社会の形成は、世界の主要国および日本にとって喫緊の課題である。本講義では、外国人が多く暮らす神戸をはじめ関西のコミュニティを題材に、多文化共生の地域づくりのあり方について考察する。多文化共生社会の形成に関する基本的な理念や知識を共有し、国や自治体、市民団体、企業、大学等が果たすべき役割を検証する。	
			マーケティング	○	本講義では、価値をつくり出し、顧客に伝え、届け、顧客の評価を知るというマーケティングの基本的知識とともに、市場、サプライチェーン、ブランディングなどビジネスワークに必要な幅広い知識を学ぶことを目的とする。	
			グローバルビジネス論	○	グローバルビジネス論とは、グローバル化の進展に伴って、国際的な視点でビジネスを行うために必要な知識やスキルを学ぶ科目である。この講義では、グローバルビジネスの基本的な概念や理論、グローバルマーケティングやグローバル戦略の方法論、グローバルビジネスにおける文化や倫理の役割などについて、さまざまな事例などを通して学び、グローバルビジネスの現状や課題を理解し、グローバル市場におけるビジネスチャンスを見つける能力を養う。	
			世界から見た日本	○	文化交流の歴史や国際社会に生起する現象などをもとに、世界と日本の関係、いわゆる「世界から見た日本」について考え議論する。日本の文化、芸術、思想、文学、アニメや漫画などのサブカルチャー、Jポップなどは世界的にも高い評価を受けている。本授業では、日本と海外の文化交流、関西の生活・社会文化（住・食・遊・学・技術・ビジネスなど）の発展の歴史などに焦点をあて、日本的ミニマリズム・精神性・洗練性など海外からみた「日本の良さ」、「関西の文化の特徴」について学び、文化の方法論、現代社会での展開法について考察する。	
			マーケットリサーチ	○	本講義は、マーケティングの基本的な知識を基盤として、市場の分析・評価に必要な基本的知識、方法論を修得することを目的とする。	
	総合 演習			グローバル工房プロジェクトⅠ	○	ビジネスや行政機関でのDXやAIが進む中、様々な組織に業務や新規事業を円滑に進めるためのプロジェクト・マネジメント力（人的リソース、進捗・品質・コストなどを的確に管理・運用する能力）が求められている。本プロジェクトでは、プロジェクト・マネジメントの基礎となる理念や知識を学ぶことに加え、実際のプロジェクトを想定したシュミレーションをグループで実施することにより、プロジェクトを遂行するための経験学習を行う。「グローバル工房プロジェクトⅡ」における実践的な学びの基礎となるプロジェクトである。

授 業 科 目 の 概 要					
(グローバル学部グローバル学科)					
科目 区分	授業科目の名称		主要授 業科目	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	総 合 演 習	グローバル工房プロジェクトⅡ	○	プロジェクトの計画に基づき、限られたリソース（予算や人員など）を活用しプロジェクトを円滑に遂行するためには、高度なマネジメント力が必要となっている。「グローバル工房プロジェクトⅡ」での実績を発展させ、実社会における具体的なプロジェクトまたはシュミレーションに参加することを通じて、プロジェクト・マネージメントにかかわる実践力を高めていく。	
		グローバル工房プロジェクトⅢ	○	「グローバル工房プロジェクトⅠ」、「グローバル工房プロジェクトⅡ」の学びを発展させ、実社会における課題解決につながるプロジェクトに参画する。本プロジェクトでは、グローバル学部の講義、経験学習の集大成として、卒業研究につながるように、継続的で実践的な学びを深めていく。各プロジェクトは、指導教員を交えたゼミ形式の学習と実践プロジェクトを接合させ、相互に連携するように設計する。個々の学生は実践的学びの成果を卒業研究において発表できるように準備を進める。	
		グローバル工房プロジェクトⅣ	○	「グローバル工房プロジェクトⅠ」、「グローバル工房プロジェクトⅡ」「グローバル工房プロジェクトⅢ」の学びを発展させ、実社会における課題解決につながるプロジェクトに参画する。本プロジェクトでは、グローバル学部の講義、経験学習の集大成として、卒業研究につながるように、継続的で実践的な学びを深めていく。各プロジェクトは、指導教員を交えたゼミ形式の学習と実践プロジェクトを接合させ、相互に連携するように設計する。個々の学生は実践的学びの成果を卒業研究において発表できるように準備を進める。	
		卒業研究	○	卒業研究は、グローバル学部で学んできたことを基礎として、自らがテーマを設定し、調査・研究またはプロジェクトを行うことによって完成させるものである。個々の学生は、「グローバル工房プロジェクトⅢ」「グローバル工房プロジェクトⅣ」で取り組んだプロジェクトなどの成果を発展させ、成果物（論文、プロジェクトレポート、作品）を発表する。成果物の詳細については、卒業研究を履修する年度の履修要項を参照すること。	
	基 幹 科 目	共 通	国際関係	本講義は現代の国際関係の諸問題に焦点をあて、国際社会がその解決にどのように取り組んできたのかを考える。国際関係の導入授業として、基礎知識の獲得を目標とする。	
			コーポレート・ファイナンス	グローバル化が進む現代において、企業は海外市場への進出やM&Aなど、多様な経営戦略を展開している。こうしたグローバルな経営戦略を成功させるためには、企業価値を最大化するための財務戦略が重要である。本講義では、企業の財務活動の目的・手法・分析方法、具体的には、企業価値の概念と測定方法、資金調達方法とそのコスト、投資評価と意思決定、配当政策などを学び、企業の財務活動の観点からグローバル経営に貢献できる人材を育成する。	
			グローバル化とwell-being	世界中の人々がよりよく生きる（well-being）ための新たなモデルを考える術を身につける学際的科目として、2021年に予定されていたダボス会議で提唱された「グレートリセット」後の世界のあり方を模索する。先進各国で進むwell-being論を紹介する手始めに、すでに経済成長期を終えて久しい日本の「人生百年時代」で進む定年延長、社会参加と幸福論を見る。次に英国の「孤立、孤独対策」、ニュージーランドの「幸福予算」を紹介し、様々なwell-beingを検討する。そこから、グローバル化の中で進むwell-being論が人々の生き方を変え、ビジネスや文化活動にどのような影響を与えるかを考えていく。	

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分			授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基 幹 科 目	共 通	公共政策論		政治、経済、社会の様々な課題を解決する公共政策の仕組み役割を学ぶ。現在のまちづくり全般に関わる日本の法制度を知り、行政組織の発展と改革を理解し、政策立案と決定の仕組み、合意形成の進め方を知る。講義では、公共の問題、公共の意味と公共政策の概念、基本理念と問題解決の方法を学び、市民・行政・市場、そして「新しい公共」との連携を検討する。一方、統合と分裂が進む欧米先進国の公共政策の展開と比較し、日本の公共政策は途上国からの注目を集める先進的な側面がある。「まちづくり」の経験が「新しい公共」として発展する過程を地域開発や防災、環境政策に活かす取組みが進む。講義の後半では、公共政策の学びをグローバルに活かすために国際協力の実態を知り、観光まちづくりを中心にビジネスと連携した地域づくりの可能性を検討する。	
			統計学		本講義では、統計学の基本的知識と分析手法を学修するとともに、解析ソフトを使った実習を通じて統計に関する基本的スキルを修得することを目的とする。	
			異文化コミュニケーション		本講義では、異なる文化についての考察を行い、多様性への理解を深めることを目的とする。様々な国の民族、文化、歴史についての知識を深め、討論やプレゼンテーションを通じて、異文化への理解や、多文化共生についての考察を深める。	
			ソーシャルビジネス論		社会課題というのは日本において大変微妙な位置づけにある。社会課題の解決はボランティア的に解決が目指されがちで、「善意」や「心がけ」のように捉えられてしまう。しかし今日の個人化した社会においては、社会課題をビジネス化し、営利・非営利を問わずサービスの提供を通じて解決が目指されるようになった。本授業では日本社会において注目されるようになったソーシャルビジネスについて具体例を扱いながら検討するものである。	
			地域社会とまちづくり		本授業の目的は地域社会におけるまちづくりについて、その今日的課題を捉えることにある。地域で生活することは私たちにとってごく当たり前であるように見えて、そうではない。社会に出たとき、私たちは地域の諸課題について考えざるを得ない事柄は多い。そこで本授業では地域について受講者にとって身近な問題から、将来関与することになるだろう問題まで幅広く扱う。そして地域課題に対して、当事者のひとりとして参与できる素養を育てる。	
	展 開 科 目	国 際 ビ ジ ネ ス	ベンチャーエコシステム		革新的なビジネス、社会事業を実現するためには、新規事業を遂行するうえで必要なマインド（起業家精神）をもち、実現性があるビジネスプランを企画、立案する能力が求められる。また、ベンチャー企業は、既存の企業、行政機関、他のベンチャー企業、ベンチャーキャピタルなどと連携し、ベンチャーエコシステム（生態系になぞらえてエコシステムと称される）を形成することによって、着実にビジネスを軌道に乗せることが可能となっている。本授業では、このベンチャーエコシステムのメカニズムを学び、よりダイナミックで柔軟な起業を可能とするような社会の実現に向けた課題を考察する。	
			組織マネジメント論		本講義では、個人と組織との関係を考察しながら、組織論の基本概念を習得することを目的とする。具体的には、個人が能力を発揮するため組織の仕組み、それを活かすための組織デザインについて考察を深める。	
			デジタルマーケティング		本講義では、デジタルマーケティングの理論や概念、戦略及びマネジメントを体系的に理解することを目的とする。具体的には、企業のマーケティング戦略の事例を交えながら、活用できる知識とスキルを身につける。	
			商品企画論		本講義では、商品企画に関する基本的概念、その手法を習得することを目的とする。具体的には様々なケーススタディ通じ、商品企画のプロセスを学ぶとともに、市場調査の手法や理論、マーケティングについての理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分			授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	国 際 ビ ジ ネ ス		ビジネスプレゼンテーション		本講義は、ビジネスモデルデザイン及びビジネスプランニングについての学修を基盤に、投資家、取引先等に対しビジネスプランの有効性、有用性、価値を伝えるためのプレゼンテーションに必要な基本的な知識とスキルを学び、プレゼンテーション資料の作成、プレゼンテーションパフォーマンスのじ実践的スキルを修得する。	
			消費者心理学		消費者の心理やビジネスコミュニケーションを学ぶとともに、職場環境の中で生じる様々な問題とそれに対処するための知識を身につけることを目的とする。	
			ビジネスモデル・デザイン		本講義は、新たなビジネスモデルの構築と既存のビジネスモデルのイノベーションに必要な基本的知識と実践的なスキルを修得することを目的とする。	
			eコマース		本講義は、観光産業の構造的イノベーションの先導的役割を果たしているeコマースに関する具体的事例を基にeコマースのビジネスの仕組み、考え方、その効果、課題、既存ビジネスや市場への影響等について基本的に理解し、とりわけ、プラットフォーム・システム及びeコマースと物流との関係については、今後の展開について考えさせることにより、ビジネス・イノベーションの意味、あり方、観光産業の構造的変化につながる可能性等について考えさせる。	
	展 開 科 目		日本酒・日本食（和食文化論）		海外の日本食レストランは今や17万軒、国内の日本料理店4万軒の4倍以上、もはや日本食は日本人だけのものではない。同様に日本酒の輸出は5百億円、海外でも生産されている。その他の日本産酒類、ワインやウイスキー輸出も1400億円、清酒種出の3倍に及ぶ。ますますグローバル化する日本の食文化と食関連産業を様々な角度から紹介する。グローバル化を食糧自給率の低下としてだけでなく、ファスト化に対抗する日本文化の問題として考える。今や日本の食文化は拡散される一方、スローフードに代表される世界のオーガニック運動をリードするものとして期待が高まり、観光客や若手料理人が日本に集っている。グローバルな視点から日本文化を知る好事例として、日本食・日本酒を中心にグローバル化する日本文化を考えていく。	
			日本語の構造Ⅰ		本講義では、普段ほとんど意識した事のないであろう日本語のシステムを、様々な観点から捉え直すことによって、日本語（ひいては言語そのもの）に対する知識を深め、また柔軟で論理的な思考を養うことを目的とする。特に、日本語が話せない外国人の視点から見た日本語とはどのようなものなのか、「外国語としての日本語」の特徴を掘えていく。	
			日本語の構造Ⅱ		本講義では「人間の言語」という大きな観点、枠組みから、日本語を捉えることを目的とする。その中で、言語学や音声学、対照言語学といった分野の基礎知識も学び、日本語の理解をより深める。 ＊「日本語の構造Ⅰ」では、日本語の文法項目に特に焦点をあてて学ぶのに対して、本科目「日本語の構造Ⅱ」では、より大きな「言語」という視点から日本語を捉える。	
			Jポップナウ		日本のポップ・カルチャーの形式及び分析方法を概説する。そしてラテンアメリカ、ヨーロッパ、東南アジアなどのポップ・カルチャーとの比較の視点から海外から見たJポップの現状を分析していく。音楽のまち神戸を中心に、関西各地のポップ・カルチャーの現場を歩き、文化論だけでなく、ポップ・カルチャーを支える様々な人々と出会う中で、日々変化を続ける日本社会の課題と、それに対応して人々の心象風景に柔軟に寄り添っていく、ポップ・カルチャーの特質を探る。	
			通訳入門		海外企業との商談や外国人スタッフとの社内会議などのビジネスの場や、国際会議やシンポジウム、外国人に外国語で日本の案内をしたり、病院、役所といった施設で外国人の日常生活をサポートするなど、様々なシーンにおいて活用できる通訳の基本について学ぶ。	集中

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分			授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	展 開 科 目		日本語教育事情		本講義では、1) 日本語がどのように教えられているのか、あるいは教えられてきたのか、日本語教育の現在の状況と歴史について学ぶ。 2) 現在の日本にいる留学生や外国人労働者がどのような状況にあるのか、その実情と彼らが（ひいては日本が）抱える課題について学ぶ。関連して、そもそも、どのようにして日本語が今のような形になったのか、その成り立ちや日本語位置づけなどについても学ぶ。	
			日本語コミュニケーション		本講義では、日本語を取り巻く社会的言語活動やコミュニケーションの方法について学修する。様々な言語研究を参照しながら日本語の特徴について考え、言語使用とコミュニケーションについての基礎知識を用いながら、身近な「日本語らしい」言語現象について解明する。	
			日本語教授法		本講義では、外国語として日本語を教えるための基礎知識について学ぶ。日本語の特徴を理解しながら、教案の組み立て方、授業の流れ、教材分析を通して、ことばを効果的に教える方法を学ぶ。1) 外国語としての日本語基礎知識を習得する。2) 日本語を教えるための授業運営について学ぶ。3) 日本語教授の実践力を養う。	
			日本語教育の実践と評価		本講義では、日本語教育における評価の方法について学習する。日本語の様々な特徴、評価法における実例を参照しながら、日本語教育の実践と評価に関する基礎知識を養う。1) 外国語としての日本語基礎知識を習得する。2) 日本語教育の方法に着目し、その実態や特徴について理解する。3) 日本語教育において用いられる評価方法について学び、実際に評価方法を使って評価してみる。	
	観 光 ま ち づ く り		グローバルツーリズム論		閉鎖的な日本の観光は急増するインバウンドでグローバル化しつつある。世界ではそれ以上のスピード感で、観光のグローバル化が進んでいる。UNWTO予測では、2030年には年間18億人の観光客が国境を超えて旅に出る。年間3億人の移民、1.5億人の難民も出る。こうしてグローバルに拡大する人流を理解し、世界各地の観光事情、日本のインバウンド問題、そして地域社会への影響を考える講義がグローバルツーリズム論である。観光学、観光ビジネスの基本であるだけでなく、グローバル学部の学びの中心としてホモモーベンスの未来を考える。その理解を踏まえ、UNWTOの持続可能な観光をより学際的にみてグローバル・ツーリズム研究の最新の成果を学んでいく。	
			ホスピタリティマネジメント		企業活動においても、行政、その他においても、「顧客視点」が経済を動かす基本である。本講義では、「顧客満足の基本」について、顧客・社員・経営など多角的な視点から学ぶことにより、「ホスピタリティ」とは何かを考察し、企業がどのような施策を執り、そこで働く社員が具体的にどのような行動にとることで、顧客満足を追求しているのかを、実際の企業の活動例から視聴覚教材を使用して学ぶ。	
			アミューズメントパーク論		テーマパークについて、経営学的観点から理解し、テーマパーク経営における問題発見と解決策を見出す能力を修得することを目的とする。テーマパークにおける収入の最大化に関する手法について理解を深める。	
			観光政策論		本講義では、わが国における観光政策の変遷とその社会背景について学び、今後の観光政策の方向性について考察する。特に、国や地方自治体などの行政機関が観光政策においてどのような役割を果たし、わが国経済にどのような影響があるかについて理解を深める。	
			市民参加論		戦後の日本の自治体では、地域自治組織の活動と広域的な市民参加の両方が発達したが、近年の人口減少や高齢化の影響もあり、それぞれ複雑な理由でどちらもが低迷し、限界が見えている。行政計画策への市民参加制度もすでに30年に及び、熟慮型参加制度が環境基本計画などで成果を上げ、より高度に専門性の高い市民参加が定着し、まちづくりの担い手を輩出している。一方、国際協力での参加はサイト・アンド・サービス等、開発に向けた自助努力であり、グラミンバンク等のマイクロ・ファイナンスも地域社会参加型の仕組みとして知られる。講義では、市民参加の戦後史を学び、先進国と途上国、都市と農村、また世代間でも異なるまちづくり意識の違いを知り、参加手法を体系的に学ぶことで、課題解決に向けたより有効な策を提案できる能力を養う。	

授 業 科 目 の 概 要					
(グローバル学部グローバル学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	観 光 ま ち づ く り	交通インフラと社会		現在交通インフラは大きな転換期を迎えている。ITCの発達でTDMがシステム化され、自動運転システムはレベル5に、公共交通もAGT等で自動化が進み、人口減少等、社会課題にぶつかっている。また、グローバルな規模で拡大し続ける人流と物流を支える交通インフラの絶え間ない技術革新は生産、流通、消費のあらゆる面で我々の生活を常に変えている。その影響は観光やビジネスに留まらず、国民文化に影響し、文化を変容させている。講義では、現代や将来の世界の交通インフラの課題を整理し、安全・安心で豊かな社会、そして人々のWell-beingを実現する交通システムの未来を提言していく。	
		文化遺産マネジメント		地域の歴史や文化の中から生成されてきた有形無形の自然・文化遺産（自然環境、文化的景観、史跡、歴史的建造物・町並み、民俗など）を活かした地域づくりが、日本各地はもとより、アジア諸国でも進んでいる。そこでは行政はもちろん、地域住民をはじめNPOなどが担い手として重要な役割を果たしている。授業では、文化遺産を中心に、多様な地域資源の基礎知識を学び、文化財保護法とその関連事業を理解し、保存と活用の技術の概要を学ぶ。世界遺産を巡る最新の国際世論を取り上げ、ICOMOS文化観光憲章やUNWTOの持続的観光理論と紹介し、世界人類のWell-beingを地域の中に実現する方法について掘り下げていく。	
		M I C E ・ I R 概論		M I C E ・ I R とは何かを理解するとともに、そのメリット・デメリットと、日本と世界におけるこれまでと今後を概観する。イベント、博覧会、展示会など、具体例を用いてM I C E のメリット・デメリットを理解する。また、I R については、大阪 I R 計画を中心に研究し理解を深める。	
	展 開 科 目	英語音声学		本科目では、英語音声学の基礎知識を学び、知識とEILレベルでの実際の発音とを結びつけられるようになる。将来教員として音読指導を行ったりするテクニックなども学ぶ。知識だけではなく、クラスでモデルを示せる発音を身につける。	
		英語学		英語学の基本的な知識と概念を理解することを目的とする。特に、音声学と形態論の分野において、また、英々辞典の使い方を通して英語の定義に慣れるとともにコミュニケーションの道具、即ち「言い換え」の技法を学ぶ。	
		英米文学概論		英文学の代表的な作品を読み、その表現や時代背景、文化などに理解を深める。授業では特に2作品を取り上げて、その言い回しや特徴などを分析するが、作品だけに留まらず、地理・歴史や世界事情などの背景、同時代の作家や作品の文学史上の位置づけや流行なども扱う。	集中
		英語学 英語科教育法Ⅰ		この科目は英語科教育法の入門で、日本の英語教育の目的に関する基礎知識、英語教師論、英語学習者論、および教材論について学ぶ。同時に中高の学習指導要領を理解し、日本の英語教育の問題点に関する知識を得て、議論を通じて気づく。また、教職課程の履修を決意する。	
		英語科教育法Ⅱ		英語の四技能および発音、文法、語彙などの指導法に関する従来型の問題点を指摘し、これを改善するための指導法について、グループでの議論（内容によって日本語または英語）を通して考える。	
		英語科教育法Ⅲ		本科目は、将来教職に就く人を対象とする。日本国内外での外国語教育（特に英語教育）の状況や指導法について学び、指導計画・授業計画の立て方などについて学ぶ。	
		英語科教育法Ⅳ		本授業では、教材研究、授業の進め方を学び、指導案の作成（日英語の2通り）を通して、中学あるいは高校の検定教科書を教材にして、実際に指導計画を作成する。また、その仕上げとして模擬授業を実施し、教育実習への準備とする。学習指導案が日英両言語で作成でき、指導案に沿って授業が実施でき、模擬授業では、自己評価だけでなく、他者の評価もできるようになることが、本授業の目標である。	

授 業 科 目 の 概 要					
(グローバル学部グローバル学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
基盤教育科目	コミュニケーション科目	学習技術		大学で授業を受けるにあたり、必要となる基礎的な能力を養う。基礎的な能力としては「聴く」「読む」「書く」「調べる」「整理する」「まとめる」「表現する」「伝える」「考える」の9つを設定し、受講の際に必要な能力から順に習得していく。そして、最終的にはコンピュータを活用してレポートを作成することを目指す。授業はテキスト『知へのステップ』の章構成にしたがって進行し、ワークシートを用いながら実践的に行う。	
		ICTリテラシー		コンピュータ（パソコン）の基本的な機能を理解し、その基本操作の演習をする。コンピュータを利用した情報の収集、整理、表現を行うために、日本語ワープロ、表計算、プレゼンテーション、電子メール、ホームページブラウザ等のソフトウェアの基本操作を演習する。また、ネットワーク社会の特質を学び、加えて知的所有権に関する基本知識を身につけることにより、情報ネットワーク社会の問題点と対応に関する認識を持ったパソコン操作の素養を身につけることを目的とする。	
		生涯スポーツⅠ		球技種目に加えニュースポーツ、個人のボディポジション確認や改善方法を学ぶ。ルールを理解と共に、身体を動かすことの楽しさやスポーツで自己表現すること、他者と共有する喜び、健康を自身で管理していく能力を身につける。次の1)～4)を学修目標とする。1) スポーツをする・みること、共に活動するメンバーに興味を持つ。2) 講義内で毎回設定されるチーム内で役割を把握・実行する。3) 戦術の理解やパフォーマンス力・バランス力を養う。4) 自己で健康管理を行う能力を身につける。	
		生涯スポーツⅡ		生涯スポーツは、体力や年齢、目的に応じて、いつでも、どこでもスポーツに親しみ、健全な発育を促すことに寄与します。この授業では「スポーツの楽しさを伝える」をテーマに企画書を作成し、計画に基づいた内容を実施することにより、スポーツイベント企画運営に必要な知識を身につけ、生涯スポーツの発展と啓蒙に貢献できる能力を養います。	
	第1外国語（英語）	英語の論理Ⅰ		「論理」とはlogicの訳語として明治時代に生まれた新しい日本語であり、本来、英語という言語の「心の習慣」ともいうべきものである。英語ネイティブと話していて、理由攻めに遭い、しばしば閉口してしまうのは、彼らの無意識的な思考様式である論理が理解できていないからである。この授業では、ディベートの「三角ロジック」をモデルに、初歩から英語の論理を学び、身近なテーマで「発信型」の論証ができるようになることを目指す。	
		英語の論理Ⅱ		英語の論理は、グローバル化という名のアメリカ化の進展に伴い、今日の世界におけるコミュニケーションのスタンダードとなっている。すべての学問の基礎となるクリティカル・シンキングも、英語の論理を煎じ詰めたものである。この授業では、「英語の論理Ⅰ」で学んだ内容をさらに押し進め、グローバル時代に学ぶ大学生として、英語による基本的な「対話型」の論証ができるようになることを目指す。	
		英語コミュニケーションⅠ		4技能はいわば一本の柱の四面であり、不可分につながっているが、その正面はオーラシー（話すこと）でなければならない。世界に文字を持たない言語はあっても、話されていない言語はないように、言語の本質はオーラシーにある。この授業では、英語のオーラシーにはじめて触れることを前提に、会話の始め方や膨らませ方を学び、CEFR A1+レベルの英語力の獲得を目指す。	
		英語コミュニケーションⅡ		「英語の論理Ⅰ」で英語的思考の基本を習得していることを前提に、この授業では「英語コミュニケーションⅠ」の内容をさらに推し進め、コミュニケーション・アプローチに基づくさまざまなアクティビティ、ペアワークを通して、身の回りのことであれば、自信を持って英語が話せるようになることを目指す。最終的には、CEFR A2レベルの英語力を養成する。	
		英語コミュニケーションⅢ		この授業では、「英語の論理Ⅰ・Ⅱ」および「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」で学んだ内容を踏まえ、よりアカデミックな英語を素材に、オーラシーを正面に据えた4技能の習得を図る。受講生の専攻分野からテーマを設定し、専門教育への橋渡しを試みながら、英語によるプレゼンテーションの能力を高める演習を行う。最終的には、CEFR B1レベルの英語力の獲得を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分			授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
基 盤 教 育 科 目	Communication	第 1 外 国 語 （ 英 語 ）	TOEICストラテジー I		本来、「TOEIC英語」など存在しない。英語は英語であって、「英語の論理」や「英語コミュニケーション」の授業を通じて、正しく英語を学んでいるなら、とくにTOEIC対策などしなくても、高得点がとれるはずなのだが、TOEICには他の試験にはない特徴的な傾向があり、その傾向を知っていることで、得点の効率が上がることもまた事実である。この授業では、TOEIC L&Rに特化してその対策を講じ、450点以上の得点を目指す。	
			TOEICストラテジー II		TOEICには、リスニング、リーディングとも、日常生活やビジネスで有用な表現が非常に多く使われており、これらをテストで得点するためだけに学ぶのは、あまりにもったいないことである。この授業では、「TOEICストラテジー I」に引き続き、実戦的なTOEICの解法を学びながら、TOEICを通してコミュニケーションスキルそのものを高める演習もふんだんに取り入れ、最終的には600点以上の得点を目指す。	
			上級英語コミュニケーション I		海外からの留学生、およびアメリカやカナダ、オーストラリアなど、英語圏の大学に留学することを考えている学生のために開講する授業である。「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の「英語を学ぶ」から、「英語で学ぶ」アプローチに切り替え、現代世界に関するさまざまな論点をテーマに、グローバルシチズンとして持つべき教養を身につける。CEFR B2～C1レベルの総合的な4技能習得を目指す。	
			上級英語コミュニケーション II		この授業では、「上級英語コミュニケーションⅠ」で学んだことを前提に、即興の英語スピーチを実践する。TOEFLやIELTSのスピーキングセクション、英検準1級・1級の二次試験（面接）などを素材に使い、それらの傾向対策も行いながら、さらに高度な発信型のコミュニケーションスキルを養成する。CEFR B2～C1レベルの総合的な4技能習得を目指す。	
			TOEFLストラテジー		アメリカの大学に留学するためには、TOEFLのスコアが必須である。日常生活やビジネスの英語を扱うTOEICに対して、現地の大学の講義を聞き、論文を読むアカデミックな英語力が問われるのがTOEFLであり、必要な語彙から、その傾向はまったく異なる。この授業では、TOEFL受験の基礎から始め、ほとんどの州立大学に留学できるとされる60～80点を目標に手厚い対策を行う。	
			IELTSストラテジー		主にイギリス、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドの大学に留学する場合には、TOEFLよりIELTSのほうが一般的である。IELTSもTOEFL同様、アカデミックな英語を問うテストであるが、出題形式にいくつかの顕著な違いがあるほか、リスニングの音声にイギリス英語が用いられることも大きな特徴である。この授業では、IELTSの傾向対策を行いながら、イギリス英語の「英音法」を体系的に学び、ヨーロッパ圏への留学の目安とされる6.0を目指す。	
	第 2 外 国 語	中国語 I		はじめて中国語を学習する学生を対象としたクラスである。初級学習者向けのテキストを用い、抑揚の変化に富んだ中国語の発音（ピンインというアルファベットによる表記法が用いられる）とその基本的な文型を学びつつ、基本的語彙を用いた初歩的な会話を取り入れることにより、平易な中国語を聞くことができ、最も基本的事項を口頭で伝えられるレベルを目指し、発音と会話表現を中心とした訓練を繰り返し行う。また学習を通して、中国に対する理解と関心を深める。		
		中国語 II		初級から中級への橋渡しを意図し、すでに学んだ初級知識の確認を行いながら、さらに一歩進んだ中国語の基礎事項を学習していく。具体的には、引続き徹底した発音訓練を行うのはもとより、基本的語彙と文型の量を少しずつ増やししながら、やや複雑な文法事項までの解説を効果的に取り入れ、そして「聞く・話す・読む・書く」などの練習を繰り返し行う。こうした取り組みを通して、中国語に関する基礎能力のより一層の向上をはかる。		

授 業 科 目 の 概 要					
(グローバル学部グローバル学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
	Communication	第2外国語	韓国・朝鮮語Ⅰ	日常生活に必要な韓国・朝鮮語の基礎会話能力の習得をめざす。韓国・朝鮮語の歴史的背景を説明した上で、基礎編として文字の仕組みと、母音、子音、終音（パッチム）、発音の変化、といった発音を学ぶ。次に会話と文章表現として、基本単語、漢字語を学んだ上で、具体的な日常生活場面を想定して、会話や文章表現を練習する。レベルとしては、韓国語検定4～5級を目標とする。	
			韓国・朝鮮語Ⅱ	日常生活に必要な韓国・朝鮮語の基礎会話能力の習得をめざす。韓国・朝鮮語の歴史的背景を説明した上で、基礎編として文字の仕組みと、母音、子音、終音（パッチム）、発音の変化、といった発音を学ぶ。次に会話と文章表現として、基本単語、漢字語を学んだ上で、具体的な日常生活場面を想定して、会話や文章表現を練習する。レベルとしては、韓国語検定3～4級を目標とする。	
			ベトナム語	日常生活に必要なベトナム語の基礎会話能力の習得をめざす。ベトナム語の歴史的背景を説明した上で、基礎編として文字の仕組みと発音を学ぶ。次に会話と文章表現として、基本単語を学んだ上で、具体的な日常生活場面を想定して、会話や文章表現を練習する。	
			マレー語	日常生活に必要なマレー語の基礎会話能力の習得をめざす。マレー語の歴史的背景を説明した上で、基礎編として文字の仕組みと発音を学ぶ。次に会話と文章表現として、基本単語を学んだ上で、具体的な日常生活場面を想定して、会話や文章表現を練習する。	
			インドネシア語	日常生活に必要なインドネシア語の基礎会話能力の習得をめざす。インドネシア語の歴史的背景を説明した上で、基礎編として文字の仕組みと発音を学ぶ。次に会話と文章表現として、基本単語を学んだ上で、具体的な日常生活場面を想定して、会話や文章表現を練習する。	
		日本語（留学生対象）	日本語Ⅰ	日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは、それぞれ週2コマずつの授業で、大学での学習に不足のない日本語能力を獲得するために、日本語能力の四技能（聞く、話す、読む、書く）を高めることを目的とする。「日本語Ⅰ」では、中級の教科書を使って、日常の出来事や社会的な話題について学び、自分の意見や考えをまとめて説明できるようになることを目標とする。	
			日本語Ⅱ	日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは、それぞれ週2コマずつの授業で、大学での学習に不足のない日本語能力を獲得するために、日本語能力の四技能（聞く、話す、読む、書く）を高めることを目的とする。「日本語Ⅱ」では、日本での生活、大学での学びに不可欠な様々な表現や語彙の拡充を図る。	
			日本語Ⅲ	日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは、それぞれ週2コマずつの授業で、大学での学習に不足のない日本語能力を獲得するために、日本語能力の四技能（聞く、話す、読む、書く）を高めることを目的とする。「日本語Ⅲ」では、あるまとまった内容を書く力からacademic writingの基礎までを学ぶ（テキスト単位のライティング力の養成）。	
			日本語Ⅳ	日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは、それぞれ週2コマずつの授業で、大学での学習に不足のない日本語能力を獲得するために、日本語能力の四技能（聞く、話す、読む、書く）を高めることを目的とする。「日本語Ⅳ」では、様々な文献の読解、要約を通じて、まとまった内容の文を読む力を育てる。	
			日本語Ⅴ	日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは、それぞれ週2コマずつの授業で、大学での学習に不足のない日本語能力を獲得するために、日本語能力の四技能（聞く、話す、読む、書く）を高めることを目的とする。「日本語Ⅴ」では、スピーチ、口頭発表などを通じて、話す力を育てる。	
			アカデミック日本語Ⅰ	講義の理解、課題やレポート執筆等、大学で学習するために必要な総合的日本語力の向上を目指す。アカデミックな文献を読み解き、ディスカッション等の活動を通じて、表現の拡充を図り、裏付けを伴った意見を述べる能力を涵養する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(グローバル学部グローバル学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
Communication	日本語 (留学生 対象)	アカデミック日本語Ⅱ	講義の理解、課題やレポート執筆等、大学で学習するために必要な総合的日本語力の向上を目指す。ニュースや論説など専門的な文献を読み解き、ディスカッション等の活動を通じて、専門的な語も含めて表現の拡充を図り、抽象的なトピックについても意見を述べる能力を涵養する。	
		日本語ライティングⅠ	レポートや論文作成など大学で学ぶのに必要な文章が書けることを目的とし、基本的な文章から論理的な文章の書き方や論理的思考の組み立て方などを体系的に学ぶ。次の1) 2) を学修目標とする。1) レポートや論文作成において必要な文章が書ける。2) 論理的文章が書ける。	
		日本語ライティングⅡ	本講義では日本語でまとめた内容を書く力からアカデミック・ライティングの基礎までを学び、大学での学習に必要な論理的に書く力を養成する。アカデミックな日本語の表現について学び、日常的な日本語からより専門的な日本語に言い換える練習を行う。アカデミックな表現を使って短い文章を書く練習をする。またペアワークやグループワークで自分やクラスメートの作文についてディスカッションすることを通して、文章構成について客観的にとらえ学ぶ。	
		ビジネス日本語	日本語科目の卒業に必要な単位を満たした学生で、更なる日本語の向上を目指す学生向けに、特に日本国内、あるいは日系の企業に就職を希望する留学生について、ビジネスシーンで必要とされる高度な日本語力を涵養することを目的とする。日本で働くために必要なビジネスマナーや表現について学び、それをロールプレイなどを通して身につけていく。	
		専門日本語	大学院進学や、研究や分析を行うために必要な、N1、そしてその上の日本語力を総合的に涵養する。ニュース記事やアカデミックな文章を読み、語彙力の強化、抽象的な概念についての意見交換等を行う。	
	コミュニ ケーシ ョンス キル 科目	リーダーシップ演習	本科目では、リーダーシップを身につけることを最終目標としている。まず、コミュニケーション能力を高めるために、自己と他者・集団を理解するためのプログラムから始め、次にディベート、ケーススタディ等へステップを進めていく。それらを通して、リーダーシップの役割について理論・体感的に理解し、リーダーとしての素養・能力を身につける。	
		プログラミング入門	データサイエンスは、科学と産業に同様に革命を起こす分野として浮上しており、今後のビッグデータ社会において、欠かせない基礎的素養となる。この科目ではビッグデータを活用するための手段としてのプログラミング手法の基礎を修得とともに、プログラミング手法を用いたデータ分析やデータの可視化に関する基本技術を身につけることを目的とする。	集中
		画像・動画編集	情報化が進むにつれ、様々なものがデジタル化されるようになった。デジタル化されたものを単に電子的に保存しておくためだけでなく、多くの人に観てもらふことを目的としたものも増加してきた。本科目では、デジタル画像に関する基礎知識を学びながら、実際に静止画やアニメーションの修正、加工などの演習を通して、大学でのプレゼンなどのみならず、さまざまな場での活用にも役立つスキルの修得を目指す。	
		ITスキル基礎	ITは現代社会においてなくてはならない社会インフラとなっている。ビジネスでも日常生活でもIT用語が一般用語として使用されている。本科目では、すべての社会人・学生が備えておくべきITに関する基礎的な知識や文書・表計算ソフトに関する操作技術の習得を目指す。また、本科目の受講後にはITに関する資格試験を受験するなど、能動的に学ぶ態度を養う。	

授 業 科 目 の 概 要					
(グローバル学部グローバル学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
基 盤 教 育 科 目	Consideration	K U I S s コ ア 科 目	評価と実践Ⅰ	本授業は1～2年生を対象とし、「自己評価能力を向上させて、自己評価に基づいて次期の目標や活動予定を設定し、日々の学習生活を充実させていく」ことを学修目標とする。具体的には、大学及び各学科の教育目標および評価に関する概念、評価方法などについて理解を深めるとともに、実際に自分自身がどのような知識や技術が身についているのかを定期的に点検し、自己評価能力を上げ、「自律できる人間」を目標とする。	
			評価と実践Ⅱ	本授業は3～4年生を対象とし、「自己評価能力を向上させて、自己評価に基づいて次期の目標や活動予定を設定し、日々の学習生活を充実させていく」ことを学修目標とする。具体的には、大学及び各学科の教育目標および評価に関する概念、評価方法などについて理解を深めるとともに、実際に自分自身がどのような知識や技術が身についているのかを定期的に点検し、自己評価能力を上げ、「自律できる人間」を目標とする。	
			人間学Ⅰ	科学は本来「人間」の生活をよりよくするために発達してきた。本講義では、様々な学問（科学）分野から、「人間」に引き寄せて、ライフコースの長いスパンを見通して、自分の人生について主体的に考え、生き抜いていくために必要な「考える手がかり」を提起していく。自分自身の人生観や世界観の確立にとって必要な知的刺激を受け、自分の生き方を考える自立した職業人になっていくことを期待する。 (オムニバス方式／全15回) (渡辺 陽介/5回) 「国際社会」をテーマとして、私たちが暮らしている社会の変容についての理解を深める。 (濱名 篤/5回) 「職業生活と社会的格差」というテーマで5回の授業を行い、職業・キャリアに関する理解を深める。 (濱名 陽子/5回) 「学び」というキーワードから人間を考える。	オムニバス
			人間学Ⅱ	科学は本来「人間」の生活をよりよくするために発達してきた。本講義では、様々な学問（科学）分野から、「人間」に引き寄せて、ライフコースの長いスパンを見通して、自分の人生について主体的に考え、生き抜いていくために必要な「考える手がかり」を提起していく。自分自身の人生観や世界観の確立にとって必要な知的刺激を受け、自分の生き方を考える自立した職業人になっていくことを期待する。 (オムニバス方式／全15回) (芦沢 真五/5回) 「多文化共生とイノベーション」をテーマとして、異文化理解力、共感力、起業家マインド、論理的思考力などを涵養する。 (鍛冶澤 千重子/5回) 「SDGsと国際協力」をテーマとし、気候変動や感染症、紛争など、世界的な課題に対する理解を深める。 (森永 速男/5回) 「防災」をテーマとし、防災・減災についての知識を身につけ、防災面での社会貢献に参画するマインドを涵養する。	オムニバス
			初年次セミナー	本講義では、次の2つの視点から学修を進める。1) キャリアデザイン：先輩たちのキャリアを材料に、大学4年間でいかに過ごすかについて考え、自分の大学生活をデザインする。2) クリティカルシンキング：大学での学びの中核となる「クリティカルシンキング」（批判的思考）の基礎を、グループワークを通して学ぶ。これらの学びを通して、自分の将来を見つめ、これから始まる大学生活に目標を持ち、また、大学での学びに必要な積極的な態度を育成する。	
			基礎演習	「学習技術」「初年次セミナー」の内容を踏まえ、専門演習（2年ゼミ）をはじめ、専門教育を積極的に学修するために必要な教養とスキルを養うことを目的とする。PBL（課題解決型学習）を通して論理的に考える力やそれを適切に表現し、人に伝える力を身につけることも目指します。	

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分			授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
基盤教育科目	Consideration	K U I S S コ ア 科目	仕事とキャリア形成Ⅰ		21世紀に入り、我が国の社会構造も大きく変化している中で、学校教育から職業生活への移行について考え、職業についての理解を深める。本科目では、前半では、職業研究や業界研究などを通して、社会や会社、仕事を見ていく方法に関する演習を行う。後半では、自己分析法や図解表現法を用いて自分の特性に気づき、その特性を生かせる職業はなにかということを考えながら、受講生自身の将来のキャリア象を具体化していく。	
			仕事とキャリア形成Ⅱ		「仕事とキャリア形成Ⅰ」で行った業界分析・職業分析を踏まえ、業界の事業戦略を考える演習を行う。業界の生きた詳細な情報を得るために、企業を対象にインタビュー調査を行う。また、ワークショップ形式により様々なケースについての問題解決策を議論し、職業理解研究を行う。後半では、社会人を対象にインタビュー調査を行い、どのような場面で社会人基礎力涵養できるのかを議論していく。	
			仕事とキャリア形成Ⅲ		2年次「仕事とキャリア形成」等で学んだ知識や手法を元にグローバルスタディやコミュニティスタディ等の経験学習と専門的な学びを整理統合し、これを材料に自己分析や専門的分析を行ってベンチマークを活かした今後の主体的な学びや経験の学習ロードマップとキャリアマップの作成と準備を行う。また、模擬面接やグループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション、社会人・企業人へのインタビューを通じて最新の社会・経済への理解と興味も涵養しながら、社会人基礎力の更新を行っていく。	集中
			リサーチ入門		本科目は、定性および定量型の調査・集計・分析の基本的な知識やスキルを修得することを目的とする。具体的な調査方法として、観察調査、インタビュー調査および質問紙調査を取り上げ、調査の基礎を演習形式で身につける。	
			データサイエンス		ソーシャル・ネットワーク・システムおよびスマートフォンなどの普及により、一般消費者が気軽にインターネットにアクセスでき、大量のデータを生成、利用できる時代になっている。また、第4次産業革命により、こうしたビッグデータを取り巻く環境はさらに進展する傾向にあり、予測や経営戦略などさまざまな場面で活用されていくだろう。本科目では、ビッグデータに関する様々な技術について、現状と今後の動向について適用事例を通して学ぶ。	
	Commitment	リ ベ ラ ル ア ー ツ 科目	日本文化論		文学作品と伝統芸能から日本文化にアプローチし、時代が移り変わっても感動を覚える「普遍性」について考える。前半では、古典文学、芸能について学び、視聴覚資料も用いて理解を深める。また、後半は指定テキストを用いて芥川龍之介の作品について学び、映画などの現代芸術にも触れる。これらのことから、日本における文化的歴史的特性を知ると同時に、真の国際人となるための視野を養う。	
			日本国憲法		本講義では、国家の基礎法である日本国憲法の解説を行なう。憲法は我々の自由が確保され、また権力の濫用を封じるための歯止めとなっている非常に重要な国法である。それゆえに、憲法の理解なくして、自由や人権を語るわけには行かない。これからの時代は豊かな人権感覚を備えた人材が求められている。本講義の学習目標の第一は、憲法の基本構造を理解し、憲法の存在意義について理解すること、第二は、なるべく多くの事例を参照しつつ、裁判所が憲法というものをどのように解釈しているのかを立体的に理解すること、第三は、人権感覚を身に付け、法的に解決できる思考力を涵養することである。	
			人権と法		これまでに実際に起きた事件（裁判例）を素材として、憲法が保障する人権とはどのような権利なのかということを中心に講述する。現実には起きた事件を通し、社会においてどのような人権問題が発生しているのかを知り、そしてそれが自分にも十分に起こりうる問題であることを認識することで、他人の苦痛に対する想像力を養い、人権に対する理解を深める。	
			宗教と共生社会		宗教と共生社会グローバル社会における多文化共生のためには、宗教は非常に重要であり、相手の人権を尊重するために大切な考え方・マインドの一つである信教の自由が認められていることが必要となる。この授業では、多文化共生社会の原点である信教の自由について、キリスト教をはじめとする宗教の歴史をたどりながらその成立の歴史を学ぶことを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要					
(グローバル学部グローバル学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
基盤 教育 科目	Commitment	リベラル アーツ 科目	倫理と社会生活	倫理学という学問と私たちが生きている社会の間の関係について学ぶ。普段の日常生活ではなじみがないように思われる倫理学が、私たちの生きる社会と密接につながっていることに気づき、社会生活の中に潜んでいる問題について自覚的に考えていくことが、本講義の大きな目的である。また、倫理学の考え方をを用いて、社会の課題に関し、自分なりに考える能力を身につけることを目指す。	
			近現代の歴史	近現代ヨーロッパの歴史を宗教、少子化、社会福祉、移民、教育、スポーツ、戦争などのトピックに分けて学んでいきます。各授業において、ヨーロッパの事例だけではなく、日本の歴史との関連性の解明も随時おこなっていきます。そのことにより、ヨーロッパの歴史と日本の歴史において異なる点と共通する点とを明らかにしながら、近現代の歴史についてグローバルな視点で理解する。	
			ジェンダーと多様性	社会には様々な差別、偏見、格差などに関する課題が存在している。課題解決のためには、人権・性・多様性に関する理解が必要である。偏見のない平等な関係づくりをめざすジェンダーの視点など、他者を尊重する考え方を身につける。また、相互理解の実現を妨げている社会の現状と課題を知り、それらを解決する方法について考える。	
			国際社会と政治	本講義は、国際政治の知識を身につけるだけでなく、世界における日本の位置づけや役割について、独自の考えを育成する事を目的とする。太平洋戦争後の日本がどのような国際環境（特に日米関係）の条件下で、復興、発展、繁栄を遂げ、現在に至るのかを振り返り、戦後から今日までの日本政治外交史の基本的な知識と理解を深める。さらに、今日のグローバル化した世界が直面する、国際社会における諸問題に対応する上で、日本が抱える外交上の問題点や課題を考察し、今後日本がどのような国家を目指し、世界の中でどのような役割を果たすべきか、自分の考えを論理的に述べる力を養う事を目指す。	
			自然と災害	自然災害の発生要因と実例、過去の災害履歴、具体的防災対策、などについて、気象、地震、津波、火山噴火などを例に知識を習得することを目的とする。自然災害の種類と特徴、発生メカニズムに関する基礎知識、災害への対処方法の基礎知識を理解すること、自然災害に関連した人為災害やエネルギーと環境問題に関する基礎知識を理解し、説明することができることを目指す。	
			教育と人間形成	人間形成という視点から、家庭、地域、学校、社会がそれぞれもっている働きや役割を考えることを目的とする。家庭教育、学校教育、社会教育という3つの大きな教育の柱のそれぞれにおいて、どのような教育が行われ、それは人間の育ちにどのようなかわりをもっているのかを分析する。最後に日本の現在の教育問題について、その概要を知る。	
			SDG s と持続可能社会	SDG s (Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標)は「持続可能な開発のためのアジェンダ2030」で採択された2030年までの目標である。SDGsは17の目標とその下位ターゲットである169のターゲットで構成されている。本科目では、SDGsの基礎的な知識や意義について各ターゲットから具体例を取り上げながら、SDGs達成・持続可能な社会の実現に向けた行動について考える。	
			AIと次世代社会	膨大なデータを収集・学習し、様々なAI (Artificial Intelligence：人工知能) が開発され、社会生活に利用されはじめている。利活用が進む AIの知識・技術を学び、素養を身に付けておくことは現代社会を生きるうえでますます重要になってきている。本科目ではAIの基礎知識に加え、社会で活用されているAI の具体的事例について説明できるようになることを目的とする。さらに、AI について自ら学び、活用する姿勢を身に付ける。	
			食と健康	この科目は、食の成分がヒトの健康や疾病と密接に関わっていることを理解できるようになることを目的とする。具体的には、食品の一次機能、二次機能、三次機能の基本的概念の理解を深め、それぞれの機能に関わる食品の成分と、疾病について学ぶことで、疾病予防を促す食生活を自ら考え、実施できることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要						
(グローバル学部グローバル学科)						
科目 区分			授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
基盤教育科目	リベラル アーツ科目		地域防災減災論		本授業では、今後ますます頻発し巨大化する各種災害をたくましく生き抜くために必要となる災害に対する基礎的な知識、災害への備え、災害発生時の対応などについて体系的に学修する。これにより、将来各方面で活躍するなかで、地域や組織における防災リーダーとして安全・安心をけん引していける人材を育成することを目標とする。さらに、履修者には、全国的に認知されている、NPO法人日本防災士機構の「防災士」資格試験の受験機会を提供し、履修者全員が「防災士」資格を取得することを目指す。	
			ボランティア論		ボランティアや市民活動など民間非営利の活動は、阪神・淡路大震災への対応を契機に大きな広がりを見せている。この授業は、ボランティアや市民による能動的な市民福祉社会づくりの取り組みを、歴史の変遷、活動の基本原則、活動の実際、民間非営利組織の動向などの視点から、理論的、実践的に学ぶことを目的にする。また、教養的理解にとどまらず、活動参加への契機となることを期待する。	集中
			グローバルヘルス		世界の7割以上の国や地域が、国際協力による支援が必要とされている。本科目では、そのために必要な国際基準の知識と実践力を高めるための手法を学習する。具体的には、世界における健康格差の実態を知り、世界平和・全人類の繁栄と福祉を願いつつ国際協力の必要性和意義を理解し、人々の健康や生活を支援する活動を地球的視野で認識する。また、国際協力の理論と実際を学びながら、国際協力に必要な知識や方法を習得する。	
			日本事情（日本社会）		本講義では、政治、社会、文化、歴史、宗教、生活習慣、社会問題など様々な側面から、日本を捉えることにより、日本への理解を深めることを目的とする。また、その過程で、今後、日本が、あるいは世界がどのような方向に進んでいくべきかを議論し、論理的かつ柔軟な思考を養う。	集中
			地域研究(北米圏)		アメリカの政治制度や社会制度などを日本の制度と比較しながら学び、アメリカという国の特徴を理解することを目的とする。日本にとって、アメリカは政治上も経済上も最も関係の深い国であり、また世界における影響も非常に大きなものとなっている。自由と多様性を尊重する移民国家・自由主義国家という観点から、アメリカという国家への理解を深める。	
			地域研究(アジア圏)		本講義では、東アジア・東南アジア地域の社会的・経済的状況を理解し、日本に生きる私たちといかなる関わりを持っているか知る。進み行くグローバリゼーションの中でこれまで以上に「多文化」化している社会に着目し、その社会的課題を理解する。	
	K U I S S コミット メント科目		コーオペ・プログラムⅠ		コーオペ・プログラムは、キャリア支援センターと各学部が共同して実施し、企業と連携して学生に実践的で有益な職場体験を提供する教育プログラムである。従来のインターンシップが企業側主体の就労体験プログラムであるのに対し、コーオペ・プログラムは大学側主体のプログラムであるという点が異なる。認定される単位はプログラムの内容・期間により異なり、コーオペ・プログラムⅠは1単位である。	集中
			コーオペ・プログラムⅡ		コーオペ・プログラムは、キャリア支援センターと各学部が共同して実施し、企業と連携して学生に実践的で有益な職場体験を提供する教育プログラムである。従来のインターンシップが企業側主体の就労体験プログラムであるのに対し、コーオペ・プログラムは大学側主体のプログラムであるという点が異なる。認定される単位はプログラムの内容・期間により異なり、コーオペ・プログラムⅡは2単位である。	集中
			コーオペ・プログラムⅢ		コーオペ・プログラムは、キャリア支援センターと各学部が共同して実施し、企業と連携して学生に実践的で有益な職場体験を提供する教育プログラムである。従来のインターンシップが企業側主体の就労体験プログラムであるのに対し、コーオペ・プログラムは大学側主体のプログラムであるという点が異なる。認定される単位はプログラムの内容・期間により異なり、コーオペ・プログラムⅢは3単位である。	集中

授 業 科 目 の 概 要					
(グローバル学部グローバル学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要授 業科目	講義等の内容	備考
基盤 教育 科目	Commitment	K U I S s コ ミ ツ ト メ ン ト 科 目	サービスラーニングⅠ	サービスラーニングとは、地域社会で貢献活動を行いながら、そこにある課題を発見し、大学で学んだ専門知識やグループワークを通して問題解決を目指すことにより、主体的に考える力や学習意欲を高める、教室での学びと社会貢献をリンクさせた学びのスタイルである。認定される単位はプログラム内容・期間により異なり、サービスラーニングⅡは1単位である。	
			サービスラーニングⅡ	サービスラーニングとは、地域社会で貢献活動を行いながら、そこにある課題を発見し、大学で学んだ専門知識やグループワークを通して問題解決を目指すことにより、主体的に考える力や学習意欲を高める、教室での学びと社会貢献をリンクさせた学びのスタイルである。認定される単位はプログラム内容・期間により異なり、サービスラーニングⅡは2単位である。	
			グローバルスタディⅠ	グローバルスタディはグローバル教育センターが主催する学部学科横断型の異文化体験・海外交流プログラムで、次の1)～4)の学習成果に対して単位認定される科目群である。1) 海外フィールドリサーチ、2) 海外サービスラーニング、3) 海外インターンシップ、4) 海外交換留学。なお認定される単位は対象となるプログラム内容・期間により異なりⅠは1単位である。	
			グローバルスタディⅡ	グローバルスタディはグローバル教育センターが主催する学部学科横断型の異文化体験・海外交流プログラムで、次の1)～4)の学習成果に対して単位認定される科目群である。1) 海外フィールドリサーチ、2) 海外サービスラーニング、3) 海外インターンシップ、4) 海外交換留学。なお認定される単位は対象となるプログラム内容・期間により異なりⅡは2単位である。	集中
			グローバルスタディⅢ	グローバルスタディはグローバル教育センターが主催する学部学科横断型の異文化体験・海外交流プログラムで、次の1)～4)の学習成果に対して単位認定される科目群である。1) 海外フィールドリサーチ、2) 海外サービスラーニング、3) 海外インターンシップ、4) 海外交換留学。なお認定される単位は対象となるプログラム内容・期間により異なりⅢは3単位である。	集中
			グローバルスタディⅣ	グローバルスタディはグローバル教育センターが主催する学部学科横断型の異文化体験・海外交流プログラムで、次の1)～4)の学習成果に対して単位認定される科目群である。1) 海外フィールドリサーチ、2) 海外サービスラーニング、3) 海外インターンシップ、4) 海外交換留学。なお認定される単位は対象となるプログラム内容・期間により異なりⅣは4単位である。	集中

目次

①設置の趣旨及び必要性	P2
②学部・学科等の特色	P6
③大学、学部・学科等の名称及び学位の名称	P7
④教育課程の編成の考え方及び特色	P8
⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件	P12
⑥編入学定員を設定する場合の具体的計画	P16
⑦企業実習や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画	P18
⑧取得可能な資格	P20
⑨入学者選抜の概要	P21
⑩教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色	P24
⑪研究の実施についての考え方、体制、取組	P25
⑫施設、設備等の整備計画	P26
⑬管理運営	P28
⑭自己点検・評価	P29
⑮情報の公表	P30
⑯教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	P31
⑰社会的・職業的自立に関する指導及び体制	P32

①設置の趣旨及び必要性

今回、本学が行う改組の概要は、既存の国際コミュニケーション学部グローバルコミュニケーション学科及び観光学科を更に発展・改革するべく、令和7年度より「グローバル学部グローバル学科」に改組するものである。なお、学位名称については、既存の文学分野を基に「学士（国際学）」とし、定員については、近年の社会情勢及び志願者動向を踏まえて155名から125名に変更する（下図参照）。

（図1：改組の概要）

現行	新設
国際コミュニケーション学部 英語コミュニケーション学科 入学定員 75 人 収容定員 300 人	グローバル学部 グローバル学科 入学定員 125 人 3 年次編入学定員 40 人 収容定員 540 人
国際コミュニケーション学部観光学科 入学定員 80 人 収容定員 320 人	

グローバル学部は、グローバル化や情報化が進んだ現代社会において、複雑に入り組んだ諸課題に対応できる人材を養成することを目的として設置する学科である。

21 世紀に入り、第4次産業革命がスタートし、AI やロボットという言葉を目にすることはすでに日常化している。しかし、情報化の進展とともに生み出された科学技術のイノベーションが、我々の日常生活にどのような影響を与え、その影響を踏まえて、いかなる社会を作り出していくのかについては、判然としない部分も多い。とりわけ日本社会の場合、少子化、高齢化、グローバル化がもたらす社会課題と対峙しながら、新しい社会のグランドデザインを設計していかなければならない。このような時代状況及び社会状況においては、これらの社会変動の趨勢を的確に捉え、来たる社会の担い手となるべき人材が求められており、その要請に中心的な役割を果たすのが、大学であることは言うまでもない。そこでこの要請に応える教育組織とするために、国際コミュニケーション学部グローバルコミュニケーション学科及び観光学科を新たに「グローバル学部グローバル学科」と改称し、教育課程、教育方法、教員組織等を改編することとする。

「グローバル学部グローバル学科」においては、「グローバル社会や地域社会が直面する諸問題に関して、社会学、経営学、政治・経済などの科学的視点から課題発見・解決する能力、語学力を含む高度なコミュニケーション能力、“Diversity, Equity and Inclusion”（DE&I：多様性、公平性、包括性）の視点をもって、グローバル社会に貢献する人材を育成する」ことを目的とする。具体的には、多文化共生に対する理解とコミュニケーション能力、社会や組織の現状を理解しマネジメントを実践する能力、データを活用し、社会の様々な現場において多様な人々と協働して課題の解決や改善を図る能力等を身につけさせることを教育研究上の目標として、研究対象を主として文学、社会学、経営学といった学問分野とし、次のとおりディプロマ・ポリシーを設定する。

ア ディプロマ・ポリシー

本学の課程を修め、126 単位の単位修得と必修等の条件を充たし、社会学や経営学などの科学的視点から課題発見・解決する能力、語学力を含む高度なコミュニケーション力、および、以下の 6 つの力・資質を総合的に活用しながらグローバル社会に貢献できる人物に学士（国際学）の学位を授与します。

（１）自律的で意欲的な態度（自律性）

自ら主体的に計画を立てて実行し、ふりかえりを行いながら取り組むことができる。

（２）社会に能動的に貢献する姿勢（社会的貢献生）

世界人類や地域社会の人々のために貢献し、より多くの人が他者と協働し参加するような貢献ができる。

（３）多様な文化や背景を理解し受け入れる能力（多様性理解）

異なる文化と価値観を受け入れ、尊重する能力を持ち、多様な地域・文化背景、人種、宗教を持つ人々と共生ならびに協働することができる。

（４）問題発見・解決力

グローバル社会や地域社会における社会的・文化的な問題について、科学的な視点から課題発見し、根拠にもとづいた解決のための提案ができる。

（５）コミュニケーションスキル

コミュニケーションについての基本的な理解をした上で、日本語・英語双方の言語で必要なコミュニケーションをとることができ、他者との対話・交渉の際に、根拠にもとづいた論理的な主張を行うことができる。

（６）専門的知識・技能の活用力

多様な存在が共生できる社会を築くために必要な専門的知識・技能を修得し、実際に想定した場面で活用することができる。

イ カリキュラム・ポリシー

本学科では、「卒業の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げる知識・技能などを修得できるように、4 年間の教育内容を体系的に編成し、教育方法を工夫して、達成状況を評価していきます。

（１）教育内容

本学科の教育課程は、基盤教育科目と専門教育科目で構成し、科目内容に応じて分類し、基礎から応用へ段階的に学べるように編成します。科目の段階的編成を明確にするために、すべての科目に内容と難易度を表現する記号と番号を付するナンバリングを行い、教育課程の体系と履修の優先度を明示します。

基盤教育科目と専門教育科目の内容は以下の通りです。

１）基盤教育科目

基盤教育科目では、生涯にわたって活躍し、豊かな人生を送るための基盤となる教養やスキルを修得します。基盤教育科目は低学年を中心に編成し、Communication、Consideration、Commitment の各科目群において、以下の内容について学びます。

〈1〉Communication 科目群では、外国語を用いたコミュニケーション能力の獲得を図るため、第一外国語として英語科目を設定し、習熟度に基づくクラス編成をとり、定期的に外部テスト等を用いて進捗度を確認しながら学びます。第二外国語としてアジア言語から中国語と韓国・朝鮮語を学びます。また、大学教育を受けるに際しての学習の基本的なスキル（アカデミックスキルズ、ICT スキル、健康づくり、他者との連帯）を学びます。

〈2〉Consideration 科目群では、大きく高校教育から大学教育への円滑な接続を実現するため、学習動機・学習目的の涵養のための時間を与え、学習生活の出発点で学習生活の方向性の明確化を図ることを目的としたもの（KU I S s コア科目）と、幅広い教養やものの見方を獲得し、地域社会あるいは海外における複雑で広範な問題について考え、多様な文化的・社会的背景をより深く理解することを目的としたもの（リベラルアーツ科目）から編成します。「KU I S s コア科目」においては、「初年次セミナー」や「基礎演習」などの初年次教育科目を通じて大学への適応力を身につけるとともに、「人間学」において、学生個々の大学での学びの意味を塾考し、卒業後の進路を見据えたキャリアビジョンを養い、将来にむけた学習計画の策定と自己評価を行うことによって、大学での学習に対する意欲を高めます。

〈3〉Commitment 科目群では、企業内プログラムであるコーオブ・プログラム、地域社会でのプログラムであるサービスラーニング、海外プログラムであるグローバルスタディにより、教室内での学びと教室外での経験を通じて、社会生活や将来の仕事に対するレリバンスを高めるとともに、社会で求められる知識・スキルを活用する力を修得します。

2) 専門教育科目

専門教育科目では、グローバル社会において、“Diversity, Equity and Inclusion”の視点から物事を理解し行動するために、コミュニケーションツールとしての英語力を強化しながら、経営学や社会学の知識・技術を学びます。基礎科目、基幹科目、展開科目から構成し、基礎科目では、本学科の基盤となる語学力と多様性理解を修得します。基幹科目では、各コース共通となる国際社会、地域社会、組織マネジメント、異文化コミュニケーションなどを学びます。1年終了時には、学生の希望や適性などを考慮してコースを決定します。本学科では、次の3つのコースを設定しますが、3つのコースを横断的に学ぶことを推奨します。

〈1〉国際ビジネスコース

主にマーケティングや組織マネジメントといった経営学を核とする教育課程を通じて、国際的な環境で新たなビジネスを展開するためのマネジメントを学びます。

〈2〉日本語・日本文化コース

日本の伝統文化、食文化、現代文化など幅広い日本文化や日本語の構造、日本語教授法などを理解し、日本語・日本文化の振興、日本からの情報発信、地域発展の方法について学びます。

〈3〉観光まちづくりコース

世界的な観光の潮流や、日本の観光政策、また観光資源など観光を中心としたまちづくりに関する知識、次世代のインバウンド観光の国際化と地域メディアの活用の方法について学びます。

3) 総合演習科目

総合演習科目は、2 年次以降に少人数の専門ゼミナールに分かれて、教室内での講義型学習と教室外での経験型学習を総合し、実践を通じて専門的な知識・技能を活用する能力を身につけます。2 年次と 3 年次に履修する「グローバル工房プロジェクト」では、様々な組織に業務や新規事業を円滑に進めるためのプロジェクト・マネジメント力が求められている中であって、プロジェクト・マネジメントの基礎となる理念や知識を学ぶことに加え、実際のプロジェクトを想定したシミュレーションをグループで実施することにより、プロジェクトを遂行するための能力を培います。。卒業研究においては、自らがテーマを設定し、調査・研究またはプロジェクトを行うことによって完成させるもので、個々の学生は、「グローバル工房プロジェクトⅢ」「グローバル工房プロジェクトⅣ」で取り組んだプロジェクトなどの成果を発展させ、成果物を発表します。

ウ アドミッション・ポリシー

本学科は、「卒業の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」及び「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」に定める教育を受けるために必要な、次に掲げる知識・技能や能力、目的意識・意欲を備えた人を求めます。このような入学者を適正に選抜するために、多様な選抜方法を実施します。

- (1) 高等学校の教育課程を幅広く修得している。
- (2) 高等学校までの履修内容の「国語総合（現代文）」を通じて、日本語運用能力（聞く・話す・読む・書くことについての基礎力、漢字検定 3 級程度以上）を身につけている。
- (3) 基礎的英語力（英検準 2 級程度、CEFR A2 レベル程度）を身につけている。
- (4) 基礎的数学力（数学Ⅰ・数学 A 程度）を身につけている。
- (5) グローバル社会や地域社会のさまざまな事象や問題に関心を持ち、それらの関係性や解決策について考える意欲を表すことができる。
- (6) 身近な社会の問題について、筋道を立てて考え、説明することができる。
- (7) 自分の経験や考えを的確に表現し、伝えることができる。
- (8) 積極的に他者と関わり、対話を通して理解しようと努めることができる。
- (9) 入学前教育として求められる、必要な基礎的知識を身につけるための e ラーニングプログラムに最後まで取り組むことができる。

②学部・学科等の特色

今回改組するグローバル学部グローバル学科の教育研究上の目的は、グローバル社会や地域社会が直面する諸問題に関して、社会学、経営学などの科学的視点から課題発見・解決する能力、語学力を含む高度なコミュニケーション能力、“Diversity, Equity and Inclusion”（DE&I: 多様性、公平性、包括性）の視点をもって、グローバル社会に貢献する人材を育成することであり、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」（平成17年1月28日）の「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」に提示された大学が有する機能のうち、「幅広い職業人養成」に重点を置きながら、兵庫県及び我が国における国際交流のパイオニアである神戸市にキャンパスを有する大学として、「社会貢献機能（地域貢献、産学連携、国際交流等）」を果たすことを目指している。

これら2つの機能を遂行し、実効あるものとするために、本学科では、学内での専門知識の修得に加え、信憑性のある客観的データに基づいて、地域の実情、企業の動向、日本社会及び世界社会の趨勢を捉える能力を身に付けるとともに、この分析力をより確かなものにするために、個別事例に即した実践演習や経験学習を重視する。

このため、グローバル学科では、履修コースとして、3つの分野、すなわち国際ビジネス分野、日本語・日本文化分野、観光まちづくり分野の教育課程を配当し、3分野を横断的に学びつつも重点的に履修することも推奨する。

（1）国際ビジネス分野

国際ビジネス分野では、主にマーケティングや組織マネジメントといった経営学を核とする教育課程を通じて、国際的な環境で新たなビジネスを展開するためのマネジメント能力を持つ人材を育成することを目的としている。卒業後の主な進路としては、外資系企業、商社、起業家、国際ビジネスコンサルタント、国際NGO、事業企画コンサルタントを想定している。

（2）日本語・日本文化分野

日本語・日本文化分野では、日本の伝統文化、食文化、現代文化など幅広い日本文化や日本語の構造、日本語教授法などを理解し、日本語・日本文化の振興、日本からの情報発信、地域の発展に資する人材を育成する。登録日本語教員の認定教育機関として認定を受けており、修了後、外部機関が実施する試験等により資格を得ることができる。卒業後の主な進路としては、外資系企業、商社、起業家、国際ビジネスコンサルタント、国際NGO、事業企画コンサルタントを想定している。

（3）観光まちづくり分野

観光まちづくり分野では、世界的な観光の潮流や、日本の観光政策、また観光資源など観光を中心としたまちづくりに関する教育内容を通じて、次世代のインバウンド観光の国際化と地域メディアやまちづくりを担う人材を育成する。卒業後の主な進路としては、旅行代理店、インバウンド観光コンサルタント、航空、ホテル、観光・文化施設、地域観光協会を想定している。

③大学、学部・学科等の名称及び学位の名称

今回の改組により新たに設置しようとする学部学科の名称は、グローバル学部 (School of Global Studies) グローバル学科 (Department of Global Studies) である。

新学部の名称については、21 世紀における、世界社会及び日本社会の変動の趨勢を、信憑性のあるデータに基づいて的確に分析し、新しい社会課題に対応できる俯瞰力・解決力・実践力を有する人材を育成する学部学科であることを示すため「グローバル学部 (school of Sociology) グローバル学科 (Department of Sociology)」(以下「本学部学科」) とする。

学位の名称については、学問分野である「文学関係」を踏まえ、教育課程や教育方法を明確に打ち出すために、「学士 (国際学)」を授与するものとする。

④教育課程の編成の考え方及び特色

ア 教育課程等編成の方針

本学部学科では、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる知識・技能などを修得させるために、基盤教育科目と専門教育科目を体系的に編成する。本学における基盤教育の位置付けは、「大学教育における専門的な学びの基盤となる学修スキルを身につける」という役割と「大学卒業後、生涯に渡る生き方の基盤となる幅広い視野や教養を身につける」という役割を担っている。

一方、専門教育科目は、「多文化共生に対する理解とコミュニケーション力」「社会や組織の現状を理解し、マネジメントを実践する力」「課題発見のための情報収集・分析力」「語学力」「社会に参画し課題を発見・解決する力」「各コースにおける専門知識等」を修得することを目的とし、基礎的な知識・スキルを修得する「基礎科目群」、それぞれの分野の中心となる「基幹科目群」、基幹科目群から更に発展的な学修につなげる「展開科目群」、これらの科目群と補完関係にあり、大学での学びの集大成へと導く「総合演習科目群」の4つの科目群から編成する。学生は2年次秋学期に「国際ビジネス分野」「日本語・日本文化分野」「観光街づくり分野」のいずれかを重点的に履修し、4年間を通じて、グローバル工房ゼミなどのゼミと、経験学習を2回必修とするなど、教室の学びと学外での経験学習等の往還を通して、専門性と現場での実践力を高める編成になっている。

イ 科目区分の設定とその理由

基盤教育科目については、本学院の教育目標である3つのC、「Communication」「Consideration」と「Commitment」に大別した、3つの科目群から編成している。「Communication」は「コミュニケーション科目」「語学科目」「コミュニケーションスキル科目」に区分され、大学教育を受けるに際しての学習の基本的なスキルを習得させるための科目群である。「Consideration」は、「KUISs コア科目」「リベラルアーツ科目」に区分され、高校教育から大学教育への円滑な接続を実現するため、学習動機・学習目的の涵養のための時間を与え、学習生活の出発点で学習生活の方向性の明確化を図るとともに、幅広い教養やものの見方を獲得し、地域社会あるいは海外における複雑で広範な問題について考え、多様な文化的・社会的背景をより深く理解することを目的とした科目群である。

「Commitment」は、教室内での学びと教室外での経験を通じて、社会生活や将来の仕事に対するレリバンスを高めるとともに、社会で求められる知識・スキルを活用する力を修得することを目的とした経験学習の科目群である。

履修順序としては、学生はまず基礎科目、基幹科目を学習し、上級学年に進むに従い、展開科目の比率が高くなっていく。低学年に配当されている基礎科目は、グローバル学科として基本的に習得させたい基礎知識・スキルと方法論を広く学ぶことを目的としており、幅広い分野から人間や社会に関する理解力や洞察力を高めるという学士課程教育の目的に合致するものである。

(教育内容)

(1) 基盤教育科目の編成方針と教育内容

基盤教育科目では、大学での学修に必要な基本的なスキルを身に付けるとともに、生涯にわたって活躍し、豊かな人生を送るための基盤となる教養やスキルを修得する。基盤教育科目は低学年を中心に編成し、以下の内容について学ぶ。

【Communication 科目群】

グローバル社会で公用語となっている英語を用いたコミュニケーション能力の獲得を図る。英語科目では、習熟度に基づくクラス編成をとり、定期的に外部テスト等を用いて進捗度を確認する。第二外国語としてアジア言語から中国語と韓国・朝鮮語を学ぶ科目を配置するとともに、外国人留学生を対象とした日本語を学ぶ科目を配置する。また、大学教育を受けるに際しての学習の基本的なスキルの獲得するための科目として、アカデミックスキルの修得を目的とした「学習技術」や ICT スキルの修得を目的とした「ICT リテラシー」、さらに生涯を通じた健康づくりや、スポーツを通じて、年齢や人種を超えて他者との連帯感を涵養するために、「生涯スポーツ」を配置する。

【Consideration 科目群】

Consideration 科目は、大きく高校教育から大学教育への円滑な接続を実現するため、学習動機・学習目的の涵養のための時間を与え、学習生活の出発点で学習生活の方向性の明確化を図ることを目的としたもの（KUIS s コア科目）と、幅広い教養やものの見方を獲得し、地域社会あるいは海外における複雑で広範な問題について考え、多様な文化的・社会的背景をより深く理解することを目的としたもの（リベラルアーツ科目）がある。

「KUIS s コア科目」においては、「初年次セミナー」や「基礎演習」などの初年次教育科目を通じて大学への適応を図るとともに、「人間とは何か」を問いつつ、多面的・多角的に人間や生き方を考える「人間学」において、学生個々の大学での学びの意味を塾考させ、卒業後の進路を見据えたキャリアビジョンを養う「仕事とキャリア形成」、将来にむけた学習計画の策定と自己評価を行う「評価と実践」により、学習動機・学習目的の涵養と学習生活の明確化を図っている。

「リベラルアーツ科目」においては、幅広い教養やものの見方を獲得し、地域社会あるいは海外における複雑で広範な問題について考え、多様な文化的・社会的背景をより深く理解するために、人文科学、社会科学、自然科学など様々な学問分野から 19 科目を配置している。

【Commitment 科目群】

教室内での学びと教室外での経験を通じて、社会生活や将来の仕事に対するレリバンスを高めるとともに、社会で求められる知識・スキルを活用する力を修得することを目的とした経験学習の科目群であり、企業内プログラムであるコーオブ・プログラム、地域社会でのプログラムであるサービ斯拉ーニング、海外プログラムであるグローバルスタディがある。

（２）専門教育科目の編成方針と教育内容

専門教育の編成方針は、第一に、グローバル社会や地域社会が直面する諸問題に関して、社会学、経営学などの科学的視点から課題発見・解決する能力、語学力を含む高度なコミュニケーション能力、“ Diversity, Equity and Inclusion”（DE&I：多様性、公平性、包括性）の視点をもって、グローバル社会に貢献する人材を養成する学科の設置目的に沿って、

1年次から2年次前半に掛けては、語学力や、日本を含む国際社会、地域社会について学び、多様性理解を育む科目を配置する。2年次には、「国際ビジネス」「日本語・日本文化」「観光まちづくり」の3つのコースに分かれ、各コースの人材養成目的に沿った科目を配置している。

専門教育科目は、前述のように「基礎科目群」「基幹科目群」「展開科目群」「総合演習科目群」の4つに区分される。

【基礎科目群】

基礎科目群には、本学科の基盤となる語学力と多様性理解の修得の狙いとして、「英語」と「グローバル」の科目群からなっている。科目区分「英語」には、英語を活用する科目を配置し、科目区分「グローバル」には、地域社会や国際社会、国際ビジネスなど国際社会への理解を深める科目を配置している。

【基幹科目群】

本学科は、2年次より「国際ビジネス」「日本語・日本文化」「観光まちづくり」の3つのコースに沿って学修を進めるが、基幹科目群には、それぞれのコースが共通として修めるべき科目を配当している。

【展開科目群】

展開科目群には、基幹科目で学んだ内容を発展させ、各コースにおける科目を配置する。

「国際ビジネス」分野においては、国際的な環境で新たなビジネスを展開するためのマネジメント能力を持つ人材を育成する狙いとして、経営学やマーケティングの基礎の上に、企画力を養成する「商品企画論」、新たなビジネスモデルをデザインする「ビジネスモデル・デザイン」等を配置する。

日本語・日本文化では、日本語・日本文化の振興、日本からの情報発信、地域の発展に資する人材を育成する狙いとして、日本の食文化や現代文化に対する理解を深める「日本酒・日本食」、「Jポップナウ」、日本語コミュニケーションの向上を図る「日本語の構造Ⅰ・Ⅱ」、「日本語コミュニケーション」などを配置する。

観光まちづくりでは、次世代のインバウンド観光の国際化と地域メディアや（まちづくり）を担う人材を育成する狙いとして、国内外の観光事情・観光政策を理解するための「グローバルツーリズム論」「観光政策論」、文化遺産の保存と活用を探る「文化遺産マネジメント」、ホスピタリティマインドを醸成する「ホスピタリティマネジメント」などを配置する。

【総合演習科目群】

総合演習科目群は、各学年に配置される「グローバル工房プロジェクト」と卒業研究から成り、「グローバル工房プロジェクト」は、様々な組織に業務や新規事業を円滑に進めるためのプロジェクト・マネジメント力が求められている中であって、プロジェクト・

マネジメントの基礎となる理念や知識を学ぶことに加え、実際のプロジェクトを想定したシミュレーションをグループで実施することにより、プロジェクトを遂行するための経験学習を行うものである。卒業研究においては、自らがテーマを設定し、調査・研究またはプロジェクトを行うことによって完成させるものである。個々の学生は、「グローバル工房プロジェクトⅢ」「グローバル工房プロジェクトⅣ」で取り組んだプロジェクトなどの成果を発展させ、成果物を発表する。

ウ 主要授業科目についての考え方

専門教育科目において、基礎的な知識・スキルを修得する基礎科目群、分野の中心となる基幹科目、基幹科目群から更に発展的な学修につなげる展開科目群、これらの科目群と補完関係にあり、大学での学びの集大成へと導く総合演習から構成されており、このうち学びの基礎となる基礎科目群と、学びを統合化する総合演習科目群を主要授業科目として考えている。

エ 単位時間数についての考え方

講義演習科目については、1 単位当たり 15 時間の授業時間及び 30 時間の時間外学修あるいは 30 時間の授業時間及び 15 時間の時間外学修を標準とし、1 単位当たり 45 時間の単位時間数を確保する。また、実験、実習、実技科目については、1 単位 45 時間の授業時間を標準とし、1 単位当たり 45 時間の単位時間数を確保する。

⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件

ア 教育方法及び教育評価の方針

本学部では、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる知識・技能などを修得させるために、以下の教育方法及び教育評価における方針を定めている。

（教育方法）

（１）グループワークを重視した学習

教室内の講義型授業では、グループワークやペアワーク、ディスカッションを活用する。これらの手法を通して、受講生同士が協働することで、学生一人ひとりが主体的・能動的に学びを深めていく。

（２）課題発見・解決力をつけるための経験学習

サービスマーケティング、グローバルスタディ、コーオプ・プログラムといった経験学習の機会を設定する。現場（フィールド）では、調査の方法論やスキル、あるいはデータ分析の手法を用いて課題を発見したり、課題解決策を提案したりする。フィールドに出る前後には事前学習と事後学習の機会を設け、経験からの学びを次の学習に活かしていく。

（３）学修成果の蓄積とふりかえり

e ポートフォリオを利用した学修成果の蓄積を通じ、学びの目標設定—記録—取りまとめ—評価のサイクルを実行する。それにより、自己の学修成果を自身で管理し、学生生活も含め「ふりかえり」（リフレクション）を実施する。学生のふりかえり結果を材料にアドバイザー教員と面談を行い、自らの学修成果の確認と次学期の目標設定に活かすようにしていく。

（教育評価）

（１）形成的評価とフィードバック

学生自身が自己評価するための材料を定期的に提供できるように、ルーブリックを活用した評価を教育活動に広く取り入れ、レポートや答案などをフィードバックするように努める。

（２）２年次終了時の専門基礎知識修得の確認

２年次終了時には、それまでの専門必修科目の学習内容の修得状況を確認し、「卒業研究」を履修する基礎レベルが修得できているかを確認する「到達確認試験」を行い、その合格を４年生の進級要件とする。

（３）卒業時の専門的知識・技能の修得の確認

在学期間が３年以上に達し、履修規程に定める GPA と修得単位数 の条件を満たすことに加え、上記「到達確認試験」の合格により、「卒業研究」の履修を認める。「卒業研究」の担当教員の指導の下、「卒業研究」で作成・制作する最終成果物 に４年間の学修成果を表す。最終成果物は、複数教員がルーブリックを用いて総括的に評価する。

イ 履修指導

上記の方針を実現するため、以下に示す教育方法及び指導体制を整備する。

(1) 入学前教育

本学では、入学予定者の大学への早期適応を促す目的で、入学前に「ウォーミングアップ学習」という制度を設けている。授業やキャンパスライフをひと足早く体験することで、大学生活に対する不安を軽減し、またノートの取り方や図書館の使い方、インターネットによる情報収集の仕方、レポートの書き方等の学修技術の基礎を学び、高校までとは大きく異なる大学での学術的な学びへの導入や友人づくりの機会とするなど、入学後のスムーズな適応への導入を図るための指導を行っている。

(2) フレッシュマンウィーク

上記ウォーミングアップ学習の後にも、新学期が始まる直前の5日間をフレッシュマンウィークとして、各種ガイダンスや新入生歓迎イベントを行っている。本学では大学全体でメンター制度を導入しており、各学科のゼミから選抜された2年生が1年生を大学生活への適応や学習面など、様々な局面でサポートする。フレッシュマンウィークでは、メンターと教職員が協同し、履修登録のアドバイジングやレポートの書き方などの学習サポート、新たな友人関係の構築サポートのための各種プログラムの実施など、様々な方向から新入生の大学への早期適応へのサポートを行っている。

(3) 初年次教育

本学では、1年次を大学での自主的な学びの助走期間と位置付け、具体的な学習方法を学ぶとともに、様々な領域の知識に触れ、知力や好奇心を刺激する初年次教育プログラムを展開している。具体的には、入学直後の学期に配置する「学習技術」では、タイムマネジメントをはじめとして聴く・読む・調べる・整理する・まとめる・書く・表現する・伝えるなど、大学での学びに最低限必要な技術を習得し、秋学期の「基礎演習」において実践的にスキルアップを行う。また、春学期の「初年次セミナー」では、大学卒業後の社会生活全般、とりわけキャリアプランについて多角的に考え、最終的には各自のキャリアプランを立てることによって社会やキャリアに関する認識や理解を深め、2年次以降の専門教育への橋渡しを行っている。

(4) 学修支援センター（オフィスアワー、学修支援チューター）

本学では、学習技術・学修習慣上の問題等を解決する支援組織として学修支援センターを設置し組織的な学修支援システムの構築を図っている。リメディアル系科目講習や国家試験対策の特別講座などを用意し、正課外での全学的な学修をサポートしている。また「学修支援チューター制度」を設け、チューターとして選抜された学生による、学生の学修支援体制を整えている。

(5) アドバイザー制度

本学では、1年春学期を高校から高等教育への導入学期として設定し、4年間の学修計画の立案を図ることとしているが、各学年において専任教員が学生のアドバイザーとして履修・学修・進路・生活等の各側面において指導助言に当たることとしている。アドバイザーは必要に応じて学科会議または専攻会議、学生課（学生相談室）、教務課、学修支援センター等、各部局と連携しながら学生のサポートを行っている。

(6) KUIS 学修ベンチマーク

本学では平成18年度に、本学学生が本学の教育理念を実現するために身に付けておく必要がある汎用的な能力を「KUIS 学修ベンチマーク」（以後ベンチマーク）として整理し、全学的に導入した。ベンチマーク改訂を重ね、現在、達成度を判断する基準（ル

ーブリック)を明示し、授業シラバスとも連動させて全ての学科目がベンチマークと有機的に結び付くよう設定している。学生は毎春・秋学期のリフレクション・デイに前期の活動をふりかえり、ベンチマークの達成状況のチェックを行うとともに、次学期の目標設定を行っている。

(7) 学修成果の蓄積と可視化 (e ポートフォリオシステム)

本学では、学生一人ひとりの学修成果を蓄積し可視化するために、e ポートフォリオシステムを導入し活用している。前述のベンチマークのエビデンスとして e ポートフォリオを位置付けており、蓄積した学修成果を Web 上でいつでもどこでも閲覧が可能で、個々が設定した卒業までのラーニング・ルートマップと照らし合わせて成長度を確認することができる。またシステムを共有するアドバイザーによる指導助言を受けながら、自身のキャリア計画を検討していくためのツールとしても活用している。

(8) 「評価と実践」及びリフレクション・デイ

本学では、1～2 年次に前述の「評価と実践Ⅰ」を、3～4 年次に「評価と実践Ⅱ」を全学必修科目として位置付けている。この科目は大学及び各学科の教育目標並びに評価に関する概念、評価方法などについて理解を深めるとともに、実際に自分自身がどのような知識や技術が身に付いているのかを定期的に点検し、自己評価能力を上げ、「自律できる人間」を目標とするものであり、春学期と秋学期の授業開始前の週に、学生一人ひとりに前学期の学習に関するふりかえりを行う「リフレクション・デイ」を設け、この科目とリンクさせている。リフレクション・デイでは学科ごとのガイダンスを行い、前学期レポートや答案の返却、蓄積してきた e ポートフォリオによる各自の到達目標達成度の確認に対するアドバイザー指導が行われ、次学期以降の履修計画や進路についての計画を立てる。またキャリアガイダンスやグローバルスタディ等の学外体験学修プログラム等の全学的なプログラムの履修案内も併せて実施している。

(9) GPA 制度

本学では、開学以来、学生の成績評価に関して GPA (General Point Average) 制度を採用している。学生の GPA を学長奨励金や奨学金の受給などの指標の一つとして採用しており、履修科目を登録する際の上限設定にも採用している。

(10) CAP 制

本学では学生の以下のとおり、直前の学期の GPA に応じて、学期毎に履修可能な単位数に上限を設定している。

直前の学期のGPA (夏学期および冬学期をのぞく)	履修登録上限単位数
3.00以上	25単位
2.50以上3.00未満	24単位
1.50以上2.50未満	22単位
1.50未満	20単位

ただし、入学後に初めて履修登録を行う際の履修登録単位数の上限は 22 単位とし、夏学期及び冬学期には履修上限を設けない。また自由科目 (教職など) や「特別研究」科目を履修登録する場合、その単位数は上限には含まれない。

ウ 卒業要件について

本学部における卒業要件は先に示した教育課程の編成の考え方に基づき、次のとおり設定する。

(表1 グローバル学部グローバル学科卒業単位数表)

科目区分			必修	選択必修		選択
専門教育科目	基礎科目		28	0		25
	基幹科目		0	8		
	展開科目		0	14		
	総合演習科目		16	0		
基盤教育科目	Communication	コミュニケーション	3	0		
		第1外国語	0	7	5	
		第2外国語	0		0	
		コミュニケーションスキル	0	1		
	consideration	KUISs コア	15	0		
		リベラルアーツ	0	6		
	consideration	KUISs コミットメント	0	3		
計			62	39		25

(資料1：履修モデル)

エ 他大学における授業科目の履修等

本学は大学コンソーシアムひょうご神戸単位互換事業に参加しており、加盟校の開放科目に対し学生の派遣及び本学の開放科目への受け入れを行い、各科目の試験成績を教務委員会に諮った上で単位互換事業参加学生の単位を認定している。海外留学の場合は、留学先のシラバスと成績表、及び学生が申請する「修得単位認定願」により、教務委員会で審議の上、単位認定を行っている。

オ 留学生の在籍管理、履修指導、生活指導等

本学は留学生ごとに教員アドバイザーがついており、履修指導及び生活指導については、当該アドバイザーが行うとともに、国際交流センター、教務センター、学生センターにおいても指導を行っている。在籍管理は、毎回授業の出席を取り、そのデータを学内の教育システムに登録している。在籍管理担当者は、毎月、留学生の授業の出席状況をデータで確認し、出席状況が芳しくない学生に対しては、メール、電話等により窓口に来るよう促し、対面にて指導をしている。また、留学生毎に教員アドバイザーがついており、そのアドバイザーからも指導するようにしている。

⑥編入学定員を設定する場合の具体的計画

ア 既修得単位の認定方法

本学科では3年次編入学20名受け入れる。入学時の既取得単位認定については62単位を包括認定とする。入学資格については次の〈1〉から〈5〉のいずれかに該当する者とする。なお、出身大学または学校の学部・学科・専攻等は問わない。

〈1〉大学を卒業した者および2025年3月に卒業見込みの者。

〈2〉大学に2年以上在学し、62単位以上を修得した者および2021年3月までに大学に2年以上在学し、62単位以上を修得見込みの者。

〈3〉短期大学、高等専門学校を卒業した者および2021年3月に卒業見込みの者。

〈4〉専修学校専門課程を修了した者および2021年3月に修了見込みの者。

〈5〉その他、本学が上記と同等以上の学力があると認めた者。

外国人留学生の出願資格は、外国籍を有する者で、次の（1）のいずれかに該当し、なおかつ（2）の条件を満たしている者とする。

（1）出願資格

〈1〉日本の大学を卒業した者および2021年3月に卒業見込みの者。

〈2〉日本の大学に2年以上在学し、62単位以上を修得した者および2021年3月までに大学に2年以上在学し、62単位以上を修得見込みの者。

〈3〉日本の短期大学・高等専門学校を卒業した者および2021年3月に卒業見込みの者。

〈4〉日本の専修学校専門課程（2年課程）を修了した者および2021年3月に修了見込みの者。

〈5〉外国の学校教育で15年以上の課程を修了した者および2021年3月に修了見込みの者。

〈6〉その他、本学が上記と同等以上の学力があると認めた者。

（2）出願条件

〈1〉日本語能力試験N2以上合格者もしくはN2以上受験予定の者、または同等程度の日本語能力を有する者。

〈2〉「留学」の在留資格を取得でき、2021年4月に本学の3年次に編入学可能な者。

上記を選考の上、学長が入学を許可することとしており、既習単位については62単位を包括認定している。

イ 履修指導方法

編入学者に対する履修指導については、編入学者に提出を求める成績証明書を基に、各編入学者に対する履修モデルを教務委員会が作成する。作成された履修モデルを基に、担当するアドバイザーが、編入学者に対する履修指導を行っている。

ウ 教育上の配慮

本学では、アドバイザー制度を導入しており、学生一人ひとりにアドバイザーが配置されている。編入学生に関しては、編入学生に特化した専門のアドバイザーを配置し、適切なアドバイスを行うとともに、編入学生を対象とした履修ガイダンスを行うなど、大学での学びを行う上で必要な支援を行っている。

エ 受け入れ予定人数

3年次編入学定員を設定し、20人を受け入れる予定としている。

(資料2：編入学生履修モデル)

⑦企業実習や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

学外実習プログラムである「KUISs コミットメント」科目群における学外実習における実習先の確保の状況、連携体制等については以下のとおりである。

（１）グローバルスタディ

〈１〉実習先確保の状況

グローバル人材に必要となる、世界の人々の多様な価値観や文化を理解し、自ら考え、行動できる人材を育成するためのプログラムとして、グローバルスタディを設定している。グローバルスタディにおける各プログラムは、本学の海外協定校及び国内の国際交流協会等による協力のもと企画実施しており、２年次以降の夏学期と冬学期に、それぞれ複数の海外および国内プログラムを設定している。

〈２〉実習先との連携体制

各プログラムは、本学もしくは協定校等により編成されている。実習先との連携体制としては、各プログラムの担当教員とグローバル教育センター及び国際交流課が、協定校等の担当教員及び事務担当者と、事前打合せ及び現地実施中のサポート、事後のフィードバック等について綿密な連携調整を図る体制を採っている。

〈３〉成績評価体制と単位認定方法

成績評価は、各プログラム担当教員によって行われ、実習先による直接評価は行わない。評価に当たっては、事前学習、活動記録、活動後の報告及びプレゼンテーションなどから、各プログラムに適した評価方法を用いて、総合的に評価する。各評価方法の配点についてはシラバス等で明示しており、評価の 60%を合格とし、単位を認定する。

(資料３：グローバルスタディ実習先一覧)

（２）サービスマーケティング

〈１〉実習先確保の状況

地域社会における社会貢献活動の実践を通じて、課題を発見し解決に向かうことにより、社会に対する責任感・問題解決能力を高めることを目的とし、サービスマーケティングを展開する。サービスマーケティングにおける実習先は、兵庫県や神戸市などの行政及び大学周辺の地区協議会、商店街やまちづくり団体等を予定しており、学生の受入数は十分な確保が可能である。

〈２〉実習先との連携体制

本学におけるサービスマーケティングは、プログラム担当教員と地域交流センター、事務局としては社会連携課が窓口となって、実習先との連携に当たる体制を採っている。具体的には受け入れ先の開拓、企画運営、実施中のサポート、学生のサポート、実施後の全体報告会を行っている。

〈3〉成績評価体制と単位認定方法

事前学修におけるレポート、活動内容についての発表（プレゼンテーション）、事後学修におけるレポートなどを総合的に評価する。評価の60%を合格とし、単位を認定する。

（資料4：サービ斯拉ーニング実習先一覧）

（3）コーオプ・プログラム

〈1〉実習先確保の状況

コーオプ・プログラムは、キャリア支援センターと各学部が共同して実施し、企業と連携して学生に実践的で有益な職場体験を提供する教育プログラムである。従来のインターンシップが企業側主体の就労体験プログラムであるのに対し、コーオプ・プログラムは大学側主体のプログラムであるという点が異なる。実習先としては、各学科に応じて企業等を選定している。

〈2〉実習先との連携体制

コーオプ・プログラムについての取り扱いは、キャリア支援センターが窓口となっており、受け入れ先企業の開拓、企業へのコーオプ・プログラムの受け入れの依頼、学生の実習参加時の事務手続きなどを行っている。また、当該コーオプ・プログラムに係る内容と成績評価方法などについて、受け入れ先企業と事前に打ち合わせを行うなどの連携を行っている。

〈3〉成績評価体制と単位認定方法

成績評価は、受け入れ先企業と科目担当者が連携して行う。評価方法としては、

①リフレクションカレッジ（モニタリングシステム）

②実習評価書（ループリック）

コーオプ・プログラムにおけるループリックを開発し、所定の評価手順に基づき、受け入れ先が評価する。

③実習報告書

④実習後のプレゼンテーション

⑤e ポートフォリオ

などがあり、それぞれのプログラムに適した評価方法を用い、配点を行う。参加者は、毎実習のふりかえりをリフレクションカレッジに記載し、企業の受入担当者がコメントを追加する。また、実習後はループリックで、受入担当者が評価を行う。科目担当者は、リフレクションカレッジの記入、ループリックの評価、受講生が実習後に作成した実習報告書と、参加者のプレゼンテーションなどを総合的に評価し、評価の60%を合格とし、単位を認定する。

（資料5：コーオプ・プログラム実習先一覧）

⑧取得可能な資格

本学部学科では、次の資格・免許状の取得に必要な科目を配置している。

(1) 高等学校教諭1種免許状(英語)

- ・ 国家資格
- ・ 卒業要件単位に含まれる科目の他、教職関連科目の履修が必要

(2) 中学校教諭1種免許状(英語)

- ・ 国家資格
- ・ 卒業要件単位に含まれる科目の他、教職関連科目の履修が必要

(3) 登録日本語教員

- ・ 国家資格
- ・ 必要科目の履修により修了証発行、資格取得には別機関が実施する試験等が必要

(4) 防災士

- ・ 民間資格
- ・ 卒業要件単位に含まれる必要科目の履修により取得可能

⑨入学者選抜の概要

本学における入学者選抜は、本学の教育方針や教育内容を理解し、志望動機が明確で、一定水準の基礎学力を有すると認められた者を選抜することを基本方針としている。

ア 入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）

本学科は、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに定める教育を受けるための条件として、次に掲げる知識・技能や能力、目的意識・意欲を備えた人を求める。

- 〈1〉 高等学校の教育課程を幅広く修得している。
- 〈2〉 高等学校までの履修内容の「国語総合（現代文）」を通じて、日本語運用能力（聞く・話す・読む・書くことについての基礎力、漢字検定 3 級程度以上）を身につけている。
- 〈3〉 基礎的英語力（英検準 2 級程度、CEFR A2 レベル程度）を身につけている。
- 〈4〉 基礎的数学力（数学 I・数学 A 程度）を身につけている。
- 〈5〉 グローバル社会や地域社会のさまざまな事象や問題に関心を持ち、それらの関係性や解決策について考える意欲を表すことができる。
- 〈6〉 身近な社会の問題について、筋道を立てて考え、説明することができる。
- 〈7〉 自分の経験や考えを的確に表現し、伝えることができる。
- 〈8〉 積極的に他者と関わり、対話を通して理解しようと努めることができる。
- 〈9〉 入学前教育として求められる、必要な基礎的知識を身につけるための e ラーニングプログラムに最後まで取り組むことができる。

イ 選抜方法

入学者選抜の方法は、アドミッション・ポリシーに基づき、学力の 3 要素を多面的・総合的に測るため、以下のように設定している。

1. 総合選抜型

（1）マッチング入試

- 〈1〉 対話重視型 志望理由書とグループワークと本相談により選抜する。
- 〈2〉 プレゼンテーション型 志望理由書とプレゼンテーション（発表・質疑応答）と面接により選抜する。
- 〈3〉 思考力型 言語運用力と推理分析力などの思考力を以て回答する検査により選抜する。
- 〈4〉 スポーツ型 志望理由書とスポーツ活動状況証明書と本相談により選抜する。

（2）公募制入試

- 〈1〉 適性検査型 志望理由書・調査書・適性検査などの、多面的評価により選抜する

2. 学校推薦型選抜入試

(1) 指定校推薦入試

〈1〉指定校推薦 指定校推薦者に対して、書類審査の上で志望理由書・面接により選抜する。

〈2〉指定校推薦外国人留学生特別型 指定校推薦者に対して、書類審査の上で志望理由書・面接により選抜する。

(2) 併設校推薦入試

〈1〉併設校推薦 併設校推薦者に対して、書類審査の上で志望理由書・面接により選抜する。

3. 一般選抜入試

〈1〉一般選抜型 学力試験により選抜する。

〈2〉大学入学共通テスト利用型 大学入学共通テストにおいて、本学が指定する教科・科目の試験成績により選抜する。

〈3〉大学入学共通テストプラス型 一般選抜型と大学入学共通テスト利用型の試験結果を基に判定します。

〈4〉英語面接利用型 学力試験に加えて、英語の面接を行い総合点で合否を判定します。

4. 特別入試

〈1〉スポーツ特別型 スポーツにおける顕著な成績をあげた者を対象に、志望理由書と調査書とスポーツ活動状況証明書と本相談により選抜する。

〈2〉吹奏楽特別型 吹奏楽における顕著な成績をあげた者を対象に、志望理由書と調査書と吹奏楽活動状況証明書と本相談により選抜する。

〈3〉帰国生徒特別型 帰国生徒を対象に、書類審査の上、学力試験と面接により選抜する。

〈4〉社会人特別型 社会人を対象に、書類審査の上、学力試験と面接により選抜する。

〈5〉外国人留学生特別型 外国人留学生を対象に、書類審査の上、学力試験と面接により選抜する。

〈6〉海外現地型 外国人留学生を対象に、書類審査の上、面接により選抜する。

〈7〉別科生特別推薦型 別科推薦者を対象に、書類審査の上、面接により選抜する。

ウ 選抜体制

本学における入学者選抜の実施体制としては、合否判定教授会、入試委員会、事務局としての入試課がその役を担っている。各選考における試験問題の作成・校正・点検及び採点体制等を含む入学者選抜業務全体の管理運営を入試委員会が統括し、その事務部門としての入試課が補佐的役割を果たすことで、先に掲げた選抜方法により入学候補者を選考し、合否判定教授会において入学候補者の入学の可否を決定する。

エ 留学生の日本語能力等の資格要件及び経費支弁能力の確認方法、在籍管理方法

(1) 留学生の日本語能力等の資格要件の確認方法

留学生の受け入れに際しては、入学試験の募集要項に、出願資格として「日本語能力試験N2以上合格者または同等程度の日本語力を有する者」と記し、その確認方法として、出願時に「日本語能力試験・日本留学試験の認定書又は成績通知書」の提出を求めている。さらに、外国人留学生入試実施時においては、個別に面接を実施し、試験担当教員が留学生の日本語能力を確認している。

(2) 留学生の経費支弁能力の確認方法

外国人留学生入試に合格した留学生に対し、入学手続き時に「経費支弁書」の提出を求めている。「経費支弁書」には、経費支弁者が留学費用に要する費用の支弁方法を記載し、それを証明するものとしている。

(3) 在籍管理方法

本学では、原則、毎回授業の出席を取り、そのデータを学内の教育システムに登録している。在籍管理担当者は、毎月、留学生の授業の出席状況をデータで確認し、出席状況が芳しくない学生に対しては、メール、電話等により窓口に来るよう促し、対面にて指導をしている。また、留学生毎に教員アドバイザーがついており、そのアドバイザーからも指導するようにしている。

オ 入学者選抜における「社会人」の定義

本学入学者選抜における「社会人」については、以下のように定義付けている。下記のいずれかに該当し、かつ3年以上の社会人経験（家事従事者を含む。大学や短期大学及び専修学校専門課程の在学年数は含まない）を有するもの。

- 〈1〉 高等学校もしくは中等教育学校を卒業した者
- 〈2〉 通常の課程による12年の学校教育を修了した者
- 〈3〉 学校教育法施行規則第69条の規定により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者

⑩教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色

グローバル学部グローバル学科は、その養成する人材像として“グローバル社会や地域社会が直面する諸問題に関して、国際的な知見と起業家精神をもって社会に貢献できる人材、Diversity, Equity and Inclusion”(DE&I:多様性、公平性、包括性)を体現する人材を育成する。この目的のため、社会学、経営学、政治・経済などの科学的視点から課題発見・解決する能力、語学力を含む高度なコミュニケーション能力、多文化共生にかかわる深い理解を醸成する教育を推進し、そのための教育研究実施組織を編成する。教育課程の考え方として、基盤教育科目と専門教育科目を体系的に編成する。本学における基盤教育の位置付けは、「大学教育における専門的な学びの基盤となる学修スキルを身につける」という役割と「大学卒業後、生涯に渡る生き方の基盤となる幅広い視野や教養を身につける」という役割を担っている。専門教育科目は、基礎的な知識・スキルを修得する基礎科目群、それぞれの分野の中心となる基幹科目、基幹科目群から更に発展的な学修につなげる展開科目群、これらの科目群と補完関係にあり、大学での学びの集大成へと導く総合演習から構成し、教育課程上主要となる基礎科目群及び総合演習に基幹教員を配置している。また、国際ビジネス、日本語・日本文化、観光まちづくりの各コースには、豊富な実務経験と教育経験を持つ教員を配置し、学科設置時の教員の平均年齢は56.7歳、その内訳は40代が3人、50代が4人、60代が8人となっている。本学の教育職員の定年は65歳となっているが、設置時に60代である教員のうち4人は、関西国際大学定年規程4条により定年を延長し、さらに完成年度に70歳を超える教員については、定年後に特任教員として雇用を継続する。通常適用される退職年齢を超える基幹教員の割合は、完成年度において28%となるが、定年等による教員の退職には、学内での昇格及び新規採用によって補充を行う。本学科における研究の中心分野は文学であるが、は各コースの中心となる専任教員が主となり各分野の研究を行っていく。また、大学としての研究機能を担保するため、博士学位の取得者の比率を一定数確保するなど、研究機関としての役割を果たすべく努力を行う。完成年度に予定している教員組織における博士学位取得者の割合は35.7%であり、全学FD及び学科FD、教員間での授業公開、優秀教員の表彰などの様々な方策を取ることで、教員の資質の維持・向上を図っていく予定である。本学科において、本学の教育研究以外の業務に従事する教員は2名を予定している。そのうち1名はすでに国際コミュニケーション学部の教員として従事しており、教育研究上の支障は生じていない。本学の教育研究以外の業務に従事する教員には、年間8単位以上の科目担当と、教育課程編成及び運営にあたって教授会への出席を求めている。

(資料6：関西国際大学定年規程)

(資料7：関西国際大学特任教員規程)

⑪研究の実施についての考え方、体制、取組

(1) 研究所による研究の実施

本学は研究を組織的に進めるために4つの研究所を設置している。教員は自身の研究テーマや専門領域に応じて関心がある研究所へ所属することができ、その研究所において共同研究を企画し進めることができる。研究所への所属については、毎年、教授会で案内しており、次年度の研究所所属について受け付けている。また研究所に所属し、複数人の教員(研究者)で組織する共同研究を計画し、審査委員会による審査(査定)の上、その共同研究に研究費が配分される研究所プロジェクトという助成制度もある。この制度は、本学において学部及び学科の垣根を越えて、共同研究を推進するものである。

(2) 紀要の投稿の促進

本学の研究成果の発表のために『関西国際大学 研究紀要』を刊行している。本学の研究の推進について検討し様々な研究支援を行う研究推進委員会が、紀要の投稿のスケジュールの提示を教授会において行っており、教員へ紀要への投稿を促している。また、本学は紀要へ投稿する論文の査読を行っている。この査読は本学の「関西国際大学研究紀要 査読ガイドライン」(令和元(2019)年度策定)に則して行われ、学内の教員が査読者となり、一定の質保証のために実施されている。また査読方法や「査読ガイドライン」の見直しも行われ、よりよき査読のための見直しに関する協議は研究推進委員会において行われている。

(3) 外部資金の獲得支援

外部資金の獲得として、科学研究費助成事業(科研費)への申請を重視している。科研費の申請および獲得に関することは、研究推進委員会の業務の一つとしており、様々な科研費申請にかかる支援を行っている。これまで同委員会は、科研費申請の学内スケジュール作成とその周知を行い、学内の科研費採択者を講師として迎え、科研費獲得の方法について共有する勉強会の開催を行っている。

(4) 研究費

教育職員には、教育及び研究活動のために使用することができる教員研究費が支給される。教員研究費は、前年度の研究実績及び科研費(科学研究費助成事業)の応募状況とその採択結果を勘案し、「関西国際大学教員研究費規程」において規定されているように「6 ランク」で教員ごとに支給額(配分額)が決定される。以上のように、科研費といった競争的資金の獲得状況も教員研究費の配分の評価の対象としている。また教員研究費で購入された図書または備品等の帰属は本学となり、本学の管理の対象となる。教員研究費の使途や支出方法については「関西国際大学教員研究費規程」において定められており、教員研究費を使用する研究出張の旅費の支出や精算については「学校法人濱名山手学院旅費規程」に基づいて行われている。

以上のように、本学は、URAなどの専門職員の配置は行っていないが、研究所における共同研究の実施、紀要への投稿と査読体制、科研費の申請支援、研究費の配分を通じて、研究支援の体制を整備している。

⑫施設、設備等の整備計画

ア 校地、運動場の整備計画

本学は、三木キャンパス（兵庫県三木市）、尼崎キャンパス（兵庫県尼崎市）、神戸山手キャンパスの3つのキャンパスを有し、総校地面積は129,149 m²であり、学生は全てのキャンパスの施設を利用することができる。運動場用地としては、三木キャンパスから1.5kmほど離れた場所に32,978 m²、神戸山手キャンパスには附属中高との共用としての計33,820 m²を整備している。グローバル学部グローバル学科は、3つのキャンパスのうち、現在の国際コミュニケーション学部を開設している神戸山手キャンパスに設置する。運動場については、教育課程上において必要な科目について使用するとともに、クラブ活動等に供するものである。グローバル学部グローバル学科を設置する神戸山手キャンパスは5つの校舎、体育館を整備し、神戸市中心部という都市部にありながらも、学生と教職員の交流及び学生の休息等に必要な空地についても整備している。学生への教育、厚生補導に必要な運動場、体育館、スポーツ施設、講堂等を備え、その利用については、適切に管理をしている。

イ 校舎等施設の整備計画

国際コミュニケーション学部で充実を図ってきた校地・運動場・校舎・図書などの施設設備を有効利用するとともに、同等の予算措置を行い継続的な施設、設備の充実を図っていく。グローバル学部グローバル学科における研究室数は専任教員数と同じ14室を用意する。グローバル学部グローバル学科の収容定員は540人であり、国際コミュニケーション学部の収容定員620人から減少している。また、国際コミュニケーション学部はグローバルコミュニケーション学科、観光学科の2学科により構成されていたが、グローバル学部は1学科による構成され、科目数が減少するため、教室等の不足は生じない。

ウ 図書等の資料及び図書館の整備計画

（1）図書資料の整備の状況

各キャンパスそれぞれに図書館を設置しており、検索システム等の使用により、相互利用は容易となっている。図書館の面積は、三木キャンパス1,290 m²、尼崎キャンパス758 m²、神戸山手キャンパス1,499 m²であり、収容可能冊数は、三木キャンパス約150,389冊、尼崎キャンパス44,444万冊、神戸山手キャンパス150,000冊、蔵書数は、三木キャンパス126,786冊、尼崎キャンパス49,898冊、神戸山手キャンパス168,944冊となっている。デジタルデータベースでは、学内LANで、共通として、朝日新聞クロスサーチ（朝日新聞記事検索）・ヨミダス（読売新聞記事検索）・日経BP記事検索サービス・CINAHL with Full Text・MEDLINE・医中誌Web・メディカルオンライン・Science Direct・PsycINFO・ERIC・Medical Finder・最新看護索引webを、学内であればどこからでも検索できるように整備し、図書館内で必ず新聞記事検索ができるように、端末固定として各キャンパスに神戸新聞データベース plus 日経テレコンを整備している。電子書籍についても導入をしており、OPACより閲覧が可能となっている。また、ディスカバリーサービスを導入し、学内文献・電子媒体で契約している資料を効果的に利用できるよう整備している。

（２）図書館の閲覧室、閲覧席数、レファレンスルーム、検索手法について

三木キャンパスの閲覧座席数は 176 席、尼崎キャンパスに 115 席、神戸山手キャンパスに 195 席の計 486 席を整備しており、収容定員の 1 割以上の座席数を確保している。また、各キャンパスに図書検索の相談等に応じるためのレファレンスカウンターを整備し、図書館所蔵資料の検索については、学内外から WEB 上で検索が可能となっている。

（３）他大学図書館等との協力について

国立情報学研究所の NACSIS-ILL（図書館相互貸借システム）に参加し、他大学図書館等と相互貸借を行うことができるような環境を整備している。

⑬管理運営

本学における教学面の管理運営については、教授会が意思決定するための審議機関となっている。その構成員は各学部の専任の教授、准教授、講師、助教である。教授会は原則として月に1回第3水曜日に会議を開催する以外に、学部長が必要と認めた場合、及び構成員の3分の1以上の要請があった場合についても臨時で開催することとなっている。

教授会における審議事項は、関西国際大学教授会規程第3条に、

- ① 学生の入学、卒業及び課程の修了に関する事項
- ② 学位の授与に関する事項
- ③ 前二号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定める事項

と規定されている。また、教授会で審議する事項の原案を検討するための委員会を置くことができ、現在下記に示す委員会が設置されている。各委員会は各学部の代表によって構成されている。

その他に、関西国際大学学科会議規程に基づき、各学科において学科会議を開催し、学生の教育、指導、学科の運営に関する事項を協議、調整を行っている。

(各種委員会)

NO	委員会名	NO	委員会名
1	入試・広報委員会	10	グローバル教育委員会
2	学生募集委員会	11	留学生募集委員会
3	高大連携委員会	12	学修支援委員会
4	教務委員会	13	教職委員会
5	教育改革委員会	14	キャリア委員会
6	初年次教育委員会	15	学生委員会
7	ICT教育委員会	16	インクルーシブ支援委員会
8	教養教育委員会	17	内部質保証委員会
9	社会連携委員会	18	研究推進委員会

⑭自己点検・評価

ア．実施方法

年度末に、全部局で当該年度の自己評価（事業計画とそれに関わる目標の達成度）を実施するとともに、次年度に向けた事業計画と目標設定を行う。各部局には、具体的な達成基準を明確にするように求めており、集約された自己評価及び次年度の事業計画は部局長と学長・副学長・事務局長等との協議により共有される。内部質保証委員会は、各部局の自己評価を基に各年度の自己評価報告書を作成する。

イ．実施体制

自己点検・評価の実施体制は、「関西国際大学内部質保証委員会規程」に基づき、内部質保証委員会にて企画・実施する。委員会は学長から指名された教育職員ならびに事務職員によって構成される。内部質保証委員会は、評価センターと緊密な連携を保ちながら、本学の教育研究活動全般について自己点検・評価を遂行し、報告書を作成・公表していく。

ウ．結果の活用・公表

年度末に行う全部局の自己評価を基に、重要かつ緊急の問題点に関しては、PD や SD のテーマとして取り上げ、全学的な認識を共有するとともに、改善につなげていく努力をしている。各部局の自己評価を基に作成した自己評価報告書は、本学のウェブサイトで公開する。

エ．評価項目

主要点検・評価項目については、財団法人日本高等教育評価機構の大学評価基準に準拠することを予定している。

オ．大学職員以外の者による検証

令和4年に財団法人日本高等教育評価機構の認証評価を受審し、認定を受けている。以降も、本学における教育改革の各取組について、個々に外部評価委員を委託し、これらの取組の自己評価についての検証を受けている。

⑮情報の公表

教育研究活動等の状況に関する情報の公表については、大学が社会における公的な教育機関として、社会に対する説明責任を果たすとともに、教育の質を向上させる観点から、積極的に公表を行っている。その方法としては、広範かつ迅速な提供を行うため本学のホームページを主な媒体としており、その項目とホームページのアドレスは下記のとおりである。

ア 大学の教育研究上の目的及び3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）に関すること

- ・ <https://www.kuins.ac.jp/academics/aim.html>
- ・ <https://www.kuins.ac.jp/about/info/3policy.html>

イ 教育研究上の基本組織に関すること

- ・ https://www.kuins.ac.jp/about/disclosure/kuis_information.html

ウ 教育研究実施組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

- ・ https://www.kuins.ac.jp/about/info/faculty_teacher.html

エ 入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

- ・ https://www.kuins.ac.jp/about/disclosure/kuis_information.html

オ 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

- ・ <https://www.kuins.ac.jp/about/disclosure/syllabus.html>

カ 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

- ・ https://www.kuins.ac.jp/about/disclosure/kuis_information.html

キ 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

- ・ https://www.kuins.ac.jp/about/disclosure/kuis_information.html

ク 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

- ・ <https://www.kuins.ac.jp/admission/guide/expense.html>

ケ 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること
(学生の修学、進路選択に関すること)

- ・ <https://www.kuins.ac.jp/lifesupport/index.html>
 - ・ <https://www.kuins.ac.jp/lifesupport/guidance/index.html>
 - ・ <https://www.kuins.ac.jp/international/index.html>
- (学生の心身の健康等に係る支援に関すること)
- ・ <https://www.kuins.ac.jp/campuslife/index.html>

コ その他（教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規程、設置認可申請書）

(教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報)

- ・ https://www.kuins.ac.jp/about/disclosure/kuis_information.html
- (学則)

- ・ <https://www.kuins.ac.jp/about/info/regulations.html>
- (設置認可申請書)

- ・ <https://www.kuins.ac.jp/about/disclosure/secchi.html>

⑩教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

ア．教職員研修PD (Professional development)

教職員の教育能力の向上を図るため、本学では高等教育研究開発センターを中心に全教職員が参加するPD (Professional development) 研修会を年間3回(8月、9月、2月)実施している。PDでは本学の教育改革の方針、各部局が行っている教育改革の取組の報告・評価、学生の状況に関する共通認識・施策の討議、教育方法に関するキャリアアップ等を扱っている。上記PDにおいては、PDの前身である教員を中心としたFaculty Development (以下FD) から一貫して、本学にとっての重要な課題を、将来に対する明確なビジョンを学生に持たせることであると認識し、テーマを「キャリア開発を教育の中でどう実現してゆくのか」ということに絞って、教員対象のPD研修会を開催し、共通認識の形成に取り組んでいる。加えて不定期ではあるが、他大学から講師を招いて教育内容を中心に教育活動の充実を図っている。それらの活動の成果は、本学及び本学科の体験・実践を重視する教育に反映されている。さらに、PD研修会では、高等教育を取り巻く環境の変化についての情報も提供し、最新の教育情勢について教職員間で共有し理解を得る場所として機能している。また、全学PDとは別に、学科FD、大学院FD、非常勤講師FD、新着任教職員研修会、事務職員研修(SD)も開催し、事務職員においては外部研修へ複数回の参加を奨励するなど、大学全体の教育力及び質の向上を図っている。

イ．授業改善

高等教育研究開発センターでは、授業内容・方法の改善のため、春学期と秋学期ごとに、学生による授業評価調査を実施している。集計結果は教授会での報告のみにとどまらず、ウェブを利用した学生への開示も行っている。また、教員は授業評価の結果、及び評価室による様々な学内の学生動向に関わる調査、データ分析を教授技術向上の一助としている。また各学科において授業公開の機会を設け、他学科の教員に見学を推奨し、教員同士で意見交換を行うなど、多面的に教員の資質向上を図っている。

ウ．ルーブリック開発

レポートやプレゼンなどテストでは測定できない学習成果を測定するために、評価基準としてのルーブリックの開発を行っている。

⑩社会的・職業的自立に関する指導及び体制

ア．教育課程内の取組について

本学の教育理念を実現する指標として「KUIS 学修ベンチマーク」を制定している。それは、3つの教育理念（自律性、社会貢献性、国際性）に加え、問題解決能力、コミュニケーション能力に関して、具体的な幾つかの評価項目により設定された学生にとっての卒業までの目標達成指針である。KUIS 学修ベンチマークの評価項目は、チェックシートとして学生に明示し、定期的（半年に1度）に具体的なアウトカムを基に自己診断させることで、学生一人ひとりが自己の学修成果を総合的に確認できる仕組みを作っている。それにより、教育理念を単なるお題目でなく、学生に実質的に身に付けて本学を卒業させることを目指している。また、社会的・職業的自立を促すための授業科目として、1年春学期の「初年次セミナー」でキャリア形成への意識を、秋学期ゼミ科目の「基礎演習」ではリーダーシップや職業理解に関する内容を取り入れている。2年春以降にはアクティブラーニング形式の「仕事とキャリア形成Ⅰ」「仕事とキャリア形成Ⅱ」において、職業研究や企業研究、自身の強み弱みの把握や具体的なキャリア計画の立案、企業インタビュー等を行う。さらに、入学時から卒業時までの必修科目として位置付けている「評価と実践Ⅰ」「評価と実践Ⅱ」においても、社会人に求められる能力の理解、将来目標設定、その能力を身に付けるための4年間の学びの具体的計画、学修成果の確認と今後の学修計画や進路の見直しを行うなど、4年間を通したキャリア教育を重層的に配置している。

イ．教育課程外の取組について

（１）アドバイザー制の活用

各学部学科に当該学科の専任教員によるアドバイザーを置き、本学の全ての学生は初年次からいずれかのアドバイザーに配置される。アドバイザーは学科の教育方針に沿って、学生の教育指導及び学生生活指導、キャリア教育その他学生からの相談を担当し、特に履修指導においては、学生が希望する進路に必要な知識・スキルを把握し、その取得に努めるよう教示している。学生はアドバイザーの指導の下、明確なキャリア設計をし、その実現に向けての大学4年間の学修計画を立てて実行していくことを目的にラーニング・ルートマップを作成し、上述「評価と実践」授業内でのふりかえりや、アドバイザーとの面談指導に活用している。

（２）キャリア支援課による就職指導

学生の就職支援を担当するキャリア支援課を設置しており、学生に履歴書指導などの就職活動の方法論を教示するだけでなく、年複数回に及ぶ就職ガイダンスを開催し、学生の就業意欲を喚起すると同時に、産業構造や職種・業種などの説明を行うことを通して、就業における知識や必要となるスキルについての理解を深めることに寄与している。

ウ．適切な体制の整備について

本学においては、教育に関する広範な諸部局を有機的に連携させるため、全学的な教育改善の取組としてPDを年に3回実施している。PDでは本学の教育改革の方

針、各部局が行っている教育改革の取組の報告・評価、学生の状況に関する共通認識・施策の討議、教育方法に関するキャリアアップ等を扱うと同時に、学生のキャリア支援についての施策も検討する。また、学長の諮問機関としてキャリア委員会を設置するなど、全学的なキャリア支援の体制を整備している。

資料目次

資料1．履修モデル

資料2．編入学履修モデル

資料3．グローバルスタディ実習提携先一覧

資料4．サービslラーニング実習提携先一覧

資料5．コーオブ・プログラム実習提携先一覧

資料6．関西国際大学定年規程

資料7．関西国際大学特任教育職員規程

日本語・日本文化 履修モデル

【CAP上限】 1春は22単位まで、以後は直前GPAに応じて20単位～MAX25単位まで。

区 分	学科必修		コース必修		選択科目		計
	科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	
1春	英文法と英音法	1			英語学	2	22
	英語スピーチで語る現代世界Ⅰ	2			地域研究(北米圏)	2	
	英語ディベートで知る現代世界Ⅰ	2					
	グローバル化と社会	2					
	グローバル概論	2					
	神戸の社会と文化	2					
	英語の論理Ⅰ	1					
	英語コミュニケーションⅠ	1					
	初年次セミナー	1					
	ICTリテラシー	1					
	学習技術	1					
	人間学Ⅰ	2					
	評価と実践Ⅰ	－					
1夏							0
1秋	英語スピーチで語る現代世界Ⅰ	2			日本文化論	2	22
	英語ディベートで知る現代世界Ⅰ	2			地域研究(アジア圏)	2	
	多文化共生論	2			画像・動画編集	2	
	マーケティング	2					
	データサイエンス	2					
	英語の論理Ⅱ	1					
	英語コミュニケーションⅡ	1					
	TOEICストラテジーⅠ	1					
	基礎演習	1					
	人間学Ⅱ	2					
	評価と実践Ⅰ	－					
1冬					グローバルスタディⅠ	1	1
2春	英語スピーチで語る現代世界Ⅰ	2	日本語の構造Ⅰ	2	英語で読む世界のニュースⅠ	2	21
	英語ディベートで知る現代世界Ⅰ	2					
	グローバルビジネス論	2					
	世界から見た日本	2					
	マーケットリサーチ	2					
	グローバル工房プロジェクトⅠ	2					
	英語コミュニケーションⅢ	1					
	TOEICストラテジーⅡ	2					
	仕事とキャリア形成Ⅰ	2					
	評価と実践Ⅰ	－					
コースを決定							
2夏							0
2秋	グローバル工房プロジェクトⅡ	2	異文化コミュニケーション	2	英語で読む世界のニュースⅡ	2	19
	評価と実践Ⅰ	1	地域社会とまちづくり	2	仕事とキャリア形成Ⅱ	2	
			Jポップナウ	2	宗教と共生社会	2	
			日本語の構造Ⅱ	2			
			日本酒・日本食(和食文化論)	2			
2冬					グローバルスタディⅡ	2	2
3春	グローバル工房プロジェクトⅢ	4	国際関係	2	SDGsと持続可能社会	2	16
	評価と実践Ⅱ	－	グローバル化とwellbeing	2	ジェンダーと多様性	2	
			日本文学	2			
			日本語教育事情	2			
3夏			通訳入門	2	サービスラーニングⅡ	2	4
3秋	グローバル工房プロジェクトⅣ	4	日本語教育の実践と評価	2	AIと次世代社会	2	12
	評価と実践Ⅱ	－	日本語コミュニケーション	2	日本事情(日本社会)	2	
3冬							0
4春	卒業研究	－	日本語教授法	2			2
	評価と実践Ⅱ	－					
4秋	卒業研究	4					5
	評価と実践Ⅱ	1					
合計		67		28		31	126

観光まちづくり 履修モデル

【CAP上限】 1春は22単位まで、以後は直前GPAに応じて20単位～MAX25単位まで。

区 分	学科必修		コース必修		選択科目		計
	科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	
1春	英文法と英音法	1			地域研究(北米圏)	2	22
	英語スピーチで語る現代世界Ⅰ	2			ボランティア論	2	
	英語ディベートで知る現代世界Ⅰ	2					
	グローバル化と社会	2					
	グローバル概論	2					
	神戸の社会と文化	2					
	英語の論理Ⅰ	1					
	英語コミュニケーションⅠ	1					
	初年次セミナー	1					
	ICTリテラシー	1					
	学習技術	1					
	人間学Ⅰ	2					
評価と実践Ⅰ	－						
1夏							0
1秋	英語スピーチで語る現代世界Ⅱ	2			地域研究(アジア圏)	2	20
	英語ディベートで知る現代世界	2			画像・動画編集	2	
	多文化共生論	2					
	マーケティング	2					
	データサイエンス	2					
	英語の論理Ⅱ	1					
	英語コミュニケーションⅡ	1					
	TOEICストラテジーⅠ	1					
	基礎演習	1					
	人間学Ⅱ	2					
	評価と実践Ⅰ	－					
1冬					グローバルスタディⅠ	1	1
2春	英語スピーチで語る現代世界Ⅱ	2			英語で読む世界のニュースⅠ	2	19
	英語ディベートで知る現代世界	2					
	グローバルビジネス論	2					
	世界から見た日本	2					
	マーケットリサーチ	2					
	グローバル工房プロジェクトⅠ	2					
	英語コミュニケーションⅢ	1					
	TOEICストラテジーⅡ	2					
	仕事とキャリア形成Ⅰ	2					
	評価と実践Ⅰ	－					
コースを決定							
2夏							0
2秋	グローバル工房プロジェクトⅡ	2	ソーシャルビジネス論	2	英語で読む世界のニュースⅡ	2	19
	評価と実践Ⅰ	1	地域社会とまちづくり	2	仕事とキャリア形成Ⅱ	2	
			アミューズメントパーク論	2	宗教と共生社会	2	
			グローバルツーリズム論	2			
			ホスピタリティマネジメント	2			
2冬					グローバルスタディⅡ	2	2
3春	グローバル工房プロジェクトⅢ	4	公共政策論	2	SDGsと持続可能社会	2	18
	評価と実践Ⅱ	－	グローバル化とwellbeing	2	ジェンダーと多様性	2	
			交通インフラと社会	2	近現代の歴史	2	
			ビジネスモデル・デザイン	2			
3夏					サービスラーニングⅡ	2	2
3秋	グローバル工房プロジェクトⅣ	4	文化遺産マネージメント	2	AIと次世代社会	2	14
	評価と実践Ⅱ	－	MICE・IR概論	2	日本事情(日本社会)	2	
			日本酒・日本食(和食文化論)	2			
3冬							0
4春	卒業研究	－	観光政策論	2			4
	評価と実践Ⅱ	－	市民参加論	2			
4秋	卒業研究	4					5
	評価と実践Ⅱ	1					
合計		67		28		31	126

国際ビジネス 履修モデル

【CAP上限】 1春は22単位まで、以後は直前GPAに応じて20単位～MAX25単位まで。

区 分	学科必修		コース必修		選択科目		計
	科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	
1春	英文法と英音法	1			地域研究(北米圏)	2	22
	英語スピーチで語る現代世界Ⅰ	2			ボランティア論	2	
	英語ディベートで知る現代世界Ⅰ	2					
	グローバル化と社会	2					
	グローバル概論	2					
	神戸の社会と文化	2					
	英語の論理Ⅰ	1					
	英語コミュニケーションⅠ	1					
	初年次セミナー	1					
	ICTリテラシー	1					
	学習技術	1					
	人間学Ⅰ	2					
評価と実践Ⅰ	－						
1夏							0
1秋	英語スピーチで語る現代世界Ⅱ	2			地域研究(アジア圏)	2	20
	英語ディベートで知る現代世界Ⅱ	2			画像・動画編集	2	
	多文化共生論	2					
	マーケティング	2					
	データサイエンス	2					
	英語の論理Ⅱ	1					
	英語コミュニケーションⅡ	1					
	TOEICストラテジーⅠ	1					
	基礎演習	1					
	人間学Ⅱ	2					
	評価と実践Ⅰ	－					
1冬					グローバルスタディⅠ	1	1
2春	英語スピーチで語る現代世界Ⅱ	2	ビジネスプレゼンテーション	2	英語で読む世界のニュースⅠ	2	21
	英語ディベートで知る現代世界Ⅱ	2					
	グローバルビジネス論	2					
	世界から見た日本	2					
	マーケットリサーチ	2					
	グローバル工房プロジェクトⅠ	2					
	英語コミュニケーションⅢ	1					
	TOEICストラテジーⅡ	2					
	仕事とキャリア形成Ⅰ	2					
	評価と実践Ⅰ	－					
コースを決定							
2夏							0
2秋	グローバル工房プロジェクトⅡ	2	ソーシャルビジネス論	2	英語で読む世界のニュースⅡ	2	19
	評価と実践Ⅰ	1	統計学	2	仕事とキャリア形成Ⅱ	2	
			アミューズメントパーク論	2	宗教と共生社会	2	
			組織マネジメント論	2			
			ホスピタリティマネジメント	2			
2冬					グローバルスタディⅡ	2	2
3春	グローバル工房プロジェクトⅢ	4	コーポレート・ファイナンス	2	近現代の歴史	2	18
	評価と実践Ⅱ	－	公共政策論	2	SDGsと持続可能社会	2	
			ベンチャーエコシステム	2	ジェンダーと多様性	2	
			ビジネスモデル・デザイン	2			
3夏					サービスラーニングⅡ	2	2
3秋	グローバル工房プロジェクトⅣ	4	デジタルマーケティング	2	AIと次世代社会	2	14
	評価と実践Ⅱ	－	MICE・IR概論	2			
			商品企画論	2			
			消費者心理学	2			
3冬							0
4春	卒業研究	－	eコマース	2			2
	評価と実践Ⅱ	－					
4秋	卒業研究	4					5
	評価と実践Ⅱ	1					
合計		67		30		29	126

編入学生 履修モデル例

【CAP上限】 3春は22単位まで、以後は直前GPAに応じて20単位～MAX25単位まで。

区 分	学科必修		コース必修		選択科目		計
	科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	
3春	グローバル工房プロジェクト 評価と実践Ⅱ グローバル化と社会 グローバル概論 ICTリテラシー	4 - 2 2 1	国際関係 グローバル化とwellbeing	2 2	日本語Ⅰ 日本語Ⅲ 日本語Ⅴ アカデミック日本語Ⅰ	2 2 2 2	21
3夏					サービスラーニングⅡ	2	2
3秋	グローバル工房プロジェクト 評価と実践Ⅱ 多文化共生論 マーケティング データサイエンス	4 - 2 2 2	異文化コミュニケーション	2	日本事情（日本社会） 日本文化論 日本語Ⅱ 日本語Ⅳ アカデミック日本語Ⅱ	2 2 2 2 2	22
3冬							0
4春	卒業研究 評価と実践Ⅱ マーケットリサーチ グローバルビジネス論 世界から見た日本	- - 2 2 2			ビジネス日本語 日本語ライティングⅠ	2 2	10
4秋	卒業研究 評価と実践Ⅱ	4 1	日本酒・日本食（和食文化論）	2	自然と災害 AIと次世代社会	2 2	11
合計		30		8		28	66

グローバルスタディ実習提携一覧

NO.	プログラムテーマ	単位	国/地域 協力先
1	産学官連携ベンチャー・エコ・システム創成による起業 家育成カリキュラムの展開	1単位	オーストラリア シドニー ウェスタンシドニー大学
2	ハワイにおける観光ホスピタリティーを学ぶボランティ ア研修	1単位	アメリカ ハワイ カピオラニコミュニティカレッジ
3	カリフォルニア州における観光リゾートにかかわる体験 型研修（カレッジ・オブ・ザ・デザート）	1単位	アメリカ ロサンゼルス カレッジオブデザート
4	米国のコミュニティ防犯と青年犯罪を中心とした犯罪に 関するフィールドワーク	2単位	アメリカ ロサンゼルス カレッジオブキャニオンズ
5	ポストコロナの新たな観光対策「外国人観光客の目線か ら見た更なる魅力的な神戸まちづくりプラン」	1単位	韓国 ソウル 祥明大学校
6	災害が多発する東南アジアにおける子供たちへの防災教 育の国際協働実践プログラム	2単位	インドネシア ジョグジャカルタ アトマジャヤジョグジャカルタ大学
7	ビッグアジアの代表国、台湾の学生たち子供たちとウェ ルネス溢れるグローバルな未来共生社会を創造しよう！	2単位	台湾 台中 亜洲大学
8	持続可能なコミュニティ・エンパワメントに向けて、子 どもたちの知的好奇心を育み、探求心をもって勉強が継 続できる教育環境支援プログラム	3単位	フィリピン フィリピン大学セブ校
9	カンボジアの貧困層の子どもたちへの教育機会の確保に 向けた現地学生との創造的学習支援活動	2単位	カンボジア プノンペン ノートン大学
10	台湾の地域社会における犯罪抑止対策についてのフィ ールドリサーチ	1単位	台湾 新竹 玄奘大学
11	外国人を看護するための、異文化理解力向上を目指す看 護専門人材育成プログラム	3単位	インドネシア ジョグジャカルタ ガジャマダ大学
12	鞍山師範学院日本語学科所属の学生に対するCLILスタ イルでの日本語教育支援活動	1単位	中国 遼寧省鞍山市 鞍山師範学院
13	AIテクノロジーをコロナ後の私たちの社会にどう活かす か ― 顔認証、ドローン、自動運転などの有効な活用につ いて考えてみよう ―	1単位	中国 山東省青島市 青島濱海学院
14	SDGsの統合的な観点から「安心・安全な」未来社会の創 造について、海外の学生たちとチームを組んでグロー バル・グローバルなイノベーションをしよう	2単位	シンガポール ナンヤンポリテクニク 台湾・東呉大学 ほか
15	ブラジルとの表現を含めた文化交流の在り方を考える	1単位	日本 関西ブラジル人コミュニティ
16	多国籍学生による『安全・安心』に関する相互理解のた めのフィールドワーク	2単位	日本
17	移民の子どもの人権・ダイバーシティを考える	1単位	日本 神戸定住外国人支援センター
18	小学校における外国にルーツのある子どもの教育の現状 と課題	1単位	①日本 神戸市内小学校②台湾 国立台中教育大学
19	三田市における外国につながりがある幼児・児童への日 本語学修支援と交流促進	1単位	日本 三田市
20	米国、カナダ、マレーシアからの学生たちと学ぶ『観光 ホスピタリティー』に関する協働教育プログラム	1単位	日本 兵庫・大阪
21	Venture Makersプログラムを基に起業家マインドを育成 する	1単位	日本 神戸

サービスラーニング実習提携一覧

	提携機関一覧
1	JICA関西
2	NPO「いちじま丹波太郎」
3	NPO法人アスロン
4	NPO法人bioa
5	あまがさき観光局
6	尼崎市公設地方卸売市場
7	一般社団法人ポノポノプレイス
8	学校法人城口学園 山手幼稚園
9	株式会社ラーベン・アンド・ニールセン・ブランチ神戸学園都市
10	上方落語協会
11	神戸市立こうべ小学校PTA・(神戸市立こうべ小学校)
12	神戸市立山の手小学校
13	神戸元町商店街連合会
14	兵庫警察署(生活安全部サイバー犯罪対策課・サイバー企画課)
15	兵庫警察署・生田警察署
16	放課後児童デイサービス みかん
17	三木市危機管理課
18	三木市ゴルフ協会
19	三木市立中央図書館
20	三木市立緑が丘小学校
21	三木ホースランドパークエオの森研修センター
22	三木ホースランドパークエクウスの森馬事センター
23	一般社団法人GREENJAM
24	宇治川市場商店街連合会
25	株式会社ドコモCS関西
26	株式会社エアグラウンド・イケダ万博実行委員
27	産業技術短期大学
28	自治会法人ゆめの樹・(株)やながわ
29	社会福祉法人E.G.F
30	深江菅田保存会
31	神戸市立山の手小学校
32	神戸市立相楽園
33	緑が丘町公民館・青山公民館・志染公民館

コーオブ・プログラム実習提携一覧

	実習先	参加予定人数	日数
1	系列の保育所・幼稚園	29	3日以上
2	尼崎の小学校・母校	20	通年
3	尼崎市内の高齢者福祉施設	7	5日以上
4	はんしんワーカーズコープ	6	5日以上
5	及び三和本通商店街振興組合	17	5日以上
6	難波愛の園幼稚園	11	3日間
7	野村證券(株)	I (1)・II (8)	I・5日 II・30日
8	王子イメージングメディア(株)神崎工場	5	5日
9	神戸酒心館	6	5日
10	WBPグループ	2	5日
11	(株)ダイネンヒューマンplus (はりまっち)	3	5日
12	ホテルヴィスキオ尼崎	5(内3留学生)	5日
13	人と防災未来センター	2	7日
14	三木市消防本部	5	2日
15	(株)ダイネンヒューマンplus (はりまっち)	2	5日
16	ハリマユナイテッド(株)	8	10日
17	兵庫県広域防災センター	5	7日
18	三木市ゴルフ協会	23	10日
19	大和ハウスブルーム(株)	9	7日
20	神戸トヨペット(株)	3	6日
21	兵庫ダイハツ販売(株)	3	5日
22	播州信用金庫	2	6日
23	(株)カース・キャリアセンター	2	実質6日
24	(株)日興商会	1	7日
25	野村證券(株)	2	5日
26	NPO法人姫路子育てサポートセンター	2	実質5日
27	六甲ミーツ・アート芸術散歩事務局 (六甲山観光(株))	①2 ②3	6日
28	(一社) ひょうご観光本部	1	5日
29	人と防災未来センター	8	実質7日
30	(株)ダイネンヒューマンplus (はりまっち)	1	5日
31	キッザニア甲子園	2	17日
32	伊勢志摩観光コンベンション機構	4	2日
33	淡路島観光協会	4	2日
34	ホテルシーモア	1	7日
35	ブライダル企業 (非常勤担当)	8	7日
36	丹波篠山市福住中自治会	2	2日
37	近畿運輸局・関西空港・淡路島観光協会 研修・視察・セミナー・旅行プラン制作	10	2日
38	近畿運輸局・関西空港・淡路島観光協会 研修・視察・セミナー・旅行プラン制作	4	2日

関西国際大学定年規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、学校法人濱名山手学院（以下「学院」という。）の関西国際大学の専任職員及び期間の定めのない労働契約への転換の申し込みを行った職員に係る定年について必要な事項を定める。

(定 年)

第2条 職員の定年については、次のとおりとする。

教育職員	満65歳
事務職員	満60歳

2 定年による退職時期は、定年に達した日の属する年度の末日とする。

(定年の延長)

第3条 学院の運営上特に必要があると認められる職員については、理事会において理事全員の3分の2以上の同意を得た場合に限り、その定年を2ヵ年延長することができるものとし、再任を妨げない。

2 任期のある職務を命ぜられた者が定年に達したときは、原則として前条第2項のとおり退職となるが、理事会が認めた場合に限り、その残存期間、定年を延長することができる。

(定年の特例)

第4条 第3条第1項の規定にかかわらず、学院の運営上のやむを得ない事情により、定年を超える年齢の者を教育職員として採用しようとする場合又は5年後の年齢が定年を超えることとなる者を教育職員として採用しようとする場合において、理事会が特に必要に認めた場合には、特例として当該職員の定年を採用時から5年を限度とすることができる。ただし、当該特例に係る教育職員の定年は、満70歳を超えることはできない。

(再雇用)

第5条 定年に達した事務職員を嘱託職員として再雇用することができる。

2 前項の再雇用に関することは、別に定める。

(適用除外)

第6条 学長については、この規程を適用しない。

(改 廃)

第7条 この規程の改廃は、理事会の議を経て学長が決定し、これを行う。

附 則

この規程は、平成10年4月1日から施行する。但し、本文第4条の規定にかかわらず、関西国際大学開設時の特例として、教育職員の採用にあつては、特例に係る教育職員の定年は、理事会の定めによるものとする。

附 則

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成29年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、2020（令和2）年4月1日から施行する。

関西国際大学特任教育職員規程

（目的）

第1条 この規程は、関西国際大学（以下「本学」という。）の教育及び研究の向上を図るために設置する特任教育職員について、その任用、服務及び給与その他別に定めるもののほか、必要な事項を定めることを目的とする。

（定義）

第2条 特任教育職員とは、次に掲げる要件のいずれにも該当する者をいう。

- （1）本学の教育方針に賛同し、本学の教育活動において特に必要と認めた者
- （2）任用、服務及び給与その他の運用について、特別の取扱いをすることを条件として雇用された者
- （3）雇用しようとする年の4月1日における年齢が75歳未満の者

（類型）

第3条 特任教育職員の類型は、次に掲げるとおりとする。

- （1）特任教育職員Ⅰ種
雇用しようとする年の4月1日における年齢が65歳以上75歳未満の者
- （2）特任教育職員Ⅱ種
雇用しようとする年の4月1日における年齢が65歳未満の者

（職位区分）

第4条 特任教育職員の職位区分は、教授、准教授、講師、助教又は助手とする。

（雇用契約）

第5条 特任教育職員の雇用は、学長の提案により、関西国際大学教育職員選考規程第2条に規定する人事委員会の資格審査を経て、理事長がこれを決定し、当該人と雇用契約を締結するものとする。

2 本学に勤務する教育職員で、関西国際大学定年規程第2条第1項の規定により、定年に達した者を特任教育職員Ⅰ種として雇用しようとするときは、学校法人濱名山手学院退職金規程（以下「退職金規程」という。）に規定する退職金を含む定年退職に伴う手続を終了後、新たに雇用契約を締結するものとする。

3 特任教育職員Ⅱ種として雇用していた者を、引き続き特任教育職員Ⅰ種として雇用しようとするときは、新たに雇用契約を締結するものとする。

4 この規程に定めるもののほか、雇用に関して必要な事項は、契約において定めるものとする。

（雇用期間）

第6条 特任教育職員の雇用期間は、月又は年を単位として4年以内とする。ただし、更新を妨げない。

2 前項に規定する雇用期間は、その必要性及び職務内容を考慮し、学長の意見を聴いて、理事長がこれを決定する。

(業務内容)

第7条 特任教育職員の業務は、本学における教育及び学長が必要と認めるものとする。

- 2 前項に規定するもののほか、特任教育職員は、教授会その他本学の運営に関する会議及び本学が実施する行事に出席を求められたときは、業務としてこれを行うものとする。この場合において、定められた勤務日以外に勤務の必要が生じたときは、前項に規定する業務に支障がないよう勤務を振り替えるものとする。

(勤務日数及び標準担当コマ数)

第8条 特任教育職員の勤務日数は、1週につき原則として2日以上とする。

- 2 特任教育職員の標準の担当コマ数（半期1週当たり90分の授業1科目相当をもって、1コマとする。以下同じ。）は、週2日勤務の場合は通年4コマ（半期8コマ相当）、週3日以上勤務する場合は通年5コマ（半期10コマ相当）とする。
- 3 前項に規定する標準の担当コマ数の2コマを超えたときは、2コマを超えた3コマ目以上に対して、関西国際大学給与規程（以下「給与規程」という。）第2条第2号に規定する増加時間手当を支給する。

(給与)

第9条 特任教育職員の本給は、別表第1及び別表第2に規定する給与基準単価に基づいて決定された当該人の給与基準単価に、1週当たりの勤務日数を乗じて得た額を年額とし、これを本給及び賞与（以下「本給等」という。）に振り分けて決定する。この場合において、本給等を算出する際に円未満の端数が生じたときは、年額を下回らないよう百円を単位として本給を調整するものとする。

- 2 給与基準単価は、当該人の経歴及び担当する業務の内容を勘案し、学長の意見を聴いて、理事長がこれを定める。
- 3 第1項の規定にかかわらず、学部若しくは学科の増設又はこれに準ずる事例に対応するための雇用にあつては、学長が必要と認めたときは、理事会の承認を得て、給与基準単価の範囲を超えて設定することができる。

(手当)

第10条 特任教育職員には、給与規程第2条第2号に規定する通勤手当を支給することができる。

(退職金)

第11条 特任教育職員Ⅱ種の者には、その退職の際、退職金規程の規定に基づき、退職金を支給することができる。

(教員研究費)

第12条 特任教育職員には、原則として教育研究費は支給しない。ただし、学長が必要と認めたときは、理事会の承認を得て、別表第3の規定により支給することができる。

(福利厚生)

第13条 特任教育職員は、日本私立学校振興・共済事業団に加入することができる。

(契約更新)

第 14 条 特任教育職員の雇用を更新するときは、学長の意見を聴いて、理事長がこれを決定する。

(補則)

第 15 条 この規程の改廃は、理事会において決定するものとする。

附 則

1. この規程は、2023（令和 5）年 4 月 1 日から施行する。

(関西国際大学特遇教育職員規程の廃止)

2. 関西国際大学特遇教育職員規程（2002（平成 14）年 4 月 1 日施行）は、廃止する。

(関西国際大学特任教育職員規程の廃止)

3. 関西国際大学特任教育職員規程（2002（平成 14）年 4 月 1 日施行）は、廃止する。

(経過措置)

4. この規程の施行の日前に締結した特遇教育職員又は特任教育職員の雇用契約については、なお従前の例による。

別表第 1（第 9 条関係）

特任教育職員Ⅰ種の給与基準単価

職 位 区 分	1 週当たり 1 日の基準単価
教授	1,000 千円～1,500 千円
准教授	800 千円～1,200 千円
講師	600 千円～1,000 千円
助教・助手	500 千円～ 800 千円

※職位区分の給与基準単価の範囲において、50 千円を単位として設定する。

別表第 2（第 9 条関係）

特任教育職員Ⅱ種の給与基準単価

職 位 区 分	1 週当たり 1 日の基準単価
教授	1,400 千円～1,800 千円
准教授	1,200 千円～1,600 千円
講師	1,000 千円～1,400 千円
助教・助手	900 千円～1,300 千円

※職位区分の給与基準単価の範囲において、50 千円を単位として設定する。

別表第 3（第 12 条関係）

特任教育職員の教員研究費

勤 務 区 分	研究費及び研究旅費
週 5 日勤務	年額 200,000 円
週 4 日勤務	年額 150,000 円
週 3 日勤務	年額 100,000 円

教 員 名 簿

学 長 又 は 校 長 の 氏 名 等						
調書 番号	役職名	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額基本給 (千円)	現 職 (就任年月)
-	学長	ハマ アツシ 濱名 篤 (平成17年4月)		博士（社会学）		関西国際大学学長（平成17.4～令和7.3）

教 員 の 氏 名 等																		
(グローバル学部グローバル学科)																		
調書 番号	教員 区分	職位	氏名 フリガナ ＜兼任（予定）年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 （千円）	担当授業科目の名称	主要授 業科目	配当 年次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (兼任年月)	教育課程の編成等の意思決定に係る会議等への参画状況				申請に係る大学 等の職務に従事 する 週当たり平均日 数	申請に係る学部 等以外の組織 (他の大学等に 置かれる学部等 を含む)での基 幹教員としての状 況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会 議等の名称		
6	基(主専)	教授	ショ-ブ パトリック Shorb Patrick ＜令和7年4月＞		Doctorate in East Asian Studies (米国)		英語スピーチで語る現代世界Ⅱ 英語スピーチで語る現代世界Ⅲ 英語ディベートで知る現代世界Ⅱ 英語ディベートで知る現代世界Ⅲ 英語で読む世界のニュースⅠ 英語で読む世界のニュースⅡ グローバル工房プロジェクトⅠ グローバル工房プロジェクトⅡ グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	1秋 2春 1秋 2春 2春 2秋 2春 2秋 3春 3秋 4春・秋	2 2 2 2 2 2 2 2 4 4 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 グローバル学部 教授 (令和4)	○		○	学科会議	6日	
7	基(主専)	教授	ジョナサン アリポंगा Jonathan Alliponga ＜令和7年4月＞		博士 (文学) (フィリピン)		英語スピーチで語る現代世界Ⅱ 英語スピーチで語る現代世界Ⅲ 英語ディベートで知る現代世界Ⅱ 英語ディベートで知る現代世界Ⅲ 英語で読む世界のニュースⅠ 英語で読む世界のニュースⅡ グローバル工房プロジェクトⅠ グローバル工房プロジェクトⅡ グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	1秋 2春 1秋 2春 2春 2秋 2春 2秋 3春 3秋 4春・秋	2 2 2 2 2 2 2 2 4 4 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 グローバル学部 教授 (令和3年4月)	○		○	学科会議	6日	
8	基(主専)	教授	エリコ 横山 雅彦 横山 雅彦 ＜令和7年4月＞		修士 (国際学)		英文法と英音法 英語スピーチで語る現代世界Ⅰ 英語スピーチで語る現代世界Ⅱ グローバル工房プロジェクトⅠ グローバル工房プロジェクトⅡ グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ 卒業研究 学習技術 卒業研究 英語の論理Ⅰ 英語の論理Ⅱ TOEICストラテジーⅠ TOEICストラテジーⅡ TOEFLストラテジー IELTSストラテジー	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	1春 1春 1春 2春 2秋 3春 3秋 4春・秋 1春 1春 1秋 2春 2春 2春	1 2 2 2 2 4 4 4 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 グローバル学部 教授 (平成30.4)	○		○	学科会議	6日		
9	基(主専)	教授	イナバ 創 伊藤 創 ＜令和7年4月＞		博士 (言語文化学)		グローバル工房プロジェクトⅠ グローバル工房プロジェクトⅡ グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ 卒業研究 日本語の構造Ⅰ 日本語の構造Ⅱ 日本語教育事情 ICTリテラシー 評価と実践Ⅰ 評価と実践Ⅱ 初年次セミナー 基礎演習	○ ○ ○ ○ ○	2春 2秋 3春 3秋 4春・秋 2春 2秋 3春 1春 1～2 3～4 1春 1秋	2 2 4 4 4 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 グローバル学部 教授 (平成10.4)	○	○	○	学科会議	6日	

教 員 の 氏 名 等																		
(グローバル学部グローバル学科)																		
調書 番号	教員 区分	職位	氏名 フリガナ ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要授 業科目	配当 年次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	教育課程の編成等の意思決定に係る会議等への参画状況			申請に係る大学 等の職務に従事 する 週当たり平均日 数	申請に係る学部 (他の大学等に 置かれる学部等 を含む)としての基 幹教員としての基 幹 務 状 況	
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会 議等の名称		
10	基(他)	教授	キムラ ヲサヒ 北村 正仁 ＜令和7年4月＞		経営学 修士 (専門 職)		マーケティング グローバルビジネス論 グローバル・フアイナンス 仕事とキャリア形成Ⅲ	○	1秋 2春 2春 3夏	2 2 2 2	1 1 1 1	関西国際大学 経営学部 教授 (令3.4)	○		○	学科会議	6日	関西国際大学 経営学部 基 (他)
11	基(他)	教授	ｼﾞｮｼｬ・ﾌﾗﾝﾈﾘｰ Joshua Flannery ＜令和7年4月＞		MBA (オーストラ リア)		グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ ベンチャーエコシステム	○ ○	3春 3秋 2秋	4 4 2	1 1 1	Innovation Dojo Japan合同 会社CEO (令3.5)	○		○	学科会議	3日	
12	基(主専)	准教授	ｱﾎﾞ ﾘﾝﾌﾞ 阿部 忍 ＜令和7年4月＞		修士 (文 学)		グローバル工房プロジェクトⅠ グローバル工房プロジェクトⅡ グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ 卒業研究 学習技術 ICT/クラシシー ビジネス日本語 専門日本語 初年次セミナー 基礎演習 仕事とキャリア形成Ⅰ 仕事とキャリア形成Ⅱ リサーチ入門	○ ○ ○ ○ ○	2春 2秋 3春 3秋 4春・秋 1春 1春 2秋 1秋 1春 2春 2秋 1秋	2 2 4 4 4 1 2 1 1 1 1 2 2 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 現代社会学部 准教授 (令2.4)	○		○	学科会議	6日	
13	基(主専)	准教授	ﾔﾏﾓﾄ ﾎﾘｽｶ 山本 晃輔 ＜令和7年4月＞		博士 (人間 科学)		神戸の社会と文化 グローバル化と社会 グローバル工房プロジェクトⅠ グローバル工房プロジェクトⅡ グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ 卒業研究 社会研究 地域社会とまちづくり 学習技術 初年次セミナー 基礎演習 リサーチ入門	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	1春 1春 2春 2秋 3春 3秋 4春・秋 2秋 2秋 1春 1春 1秋 1秋	2 2 2 2 4 4 4 2 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 社会学部 准教授 (令3.4)	○		○	学科会議	6日	

教 員 の 氏 名 等																		
(グローバル学部グローバル学科)																		
調書 番号	教員 区分	職位	氏名 フリガナ 氏名 ＜<兼任(予定) 年月＞＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要授 業科目	配当 年次	担 単 位 数	当 年 講 義	現 職 (就任年)	教育課程の編成等の意思決定に係る会議等への参画状況				申請に係る大学 等の職務に従事 する 週当たり平均日 数	申請に係る学部 等以外の組織 (他の大学等に 置かれる学部等 を含む)としての基 幹教員としての状 況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会 議等の名称		
							グローバル工房プロジェクトⅠ グローバル工房プロジェクトⅡ グローバル工房プロジェクトⅢ グローバル工房プロジェクトⅣ 卒業研究 公共政策論 グローバルツーリズム論 観光政策論 文化遺産マネジメント 学習技術 初年次セミナー 基礎演習 サービスマーケティングⅠ	○ ○ ○ ○ ○	2春 2秋 3春 4春・秋 2秋 4春 3秋 1春 1春 1秋 2春	2 2 4 4 4 2 2 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 国際コミュニケーション学部 准教授 (令和2.4)	○		○ 学科会議	6日		
							国際関係 日本事情 (日本社会) 国際社会と政治 SDG s と持続可能社会		2春 1春・秋 1春・秋 1春・秋	2 2 2 2	1 1 1 1	関西国際大学 国際コミュニケーション学部 教授 (令和5.4)					6日	
							統計学		2秋	2	1	関西国際大学 社会科学部 教授 (令和2.4)					6日	
							消費者心理学		3秋	2	1	関西国際大学 心理学部 講師 (令和5.4)					6日	
							Jポップナウ		2秋	2	1	関西国際大学 社会科学部 准教授 (令和2.4)					6日	
							日本語コミュニケーション 日本語教授法 日本語教育の実践と評価 サービスマーケティングⅡ ユー・オブ・プログラムのⅠ ユー・オブ・プログラムのⅢ 日本語ライティングⅠ 日本語ライティングⅡ 専門日本語 アカデミック日本語		2秋 3春 3秋 2春 1冬 2夏 2春 2秋 2春 2秋	2 2 2 2 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	関西国際大学 経営学部 教授 (令和20.1)				6日		
14	基(主専)	准教授	舩村*リ ヒシ 高根沢 均 ＜令和7年4月＞		修士 (学 術) 修士 (教育 学)													
15	その他	教授	ジ'カ'リ ヤコ 實川 眞理子 ＜令和7年4月＞		修士 (社会 学)													
16	その他	教授	ワ'ハ' ヲ'ヤ 渡辺 卓也 ＜令和7年4月＞		博士 (理 学)													
17	その他	講師	ア'ヨ' ミ 有古 美恵 ＜令和7年4月＞		博士 (心理 学)													
18	その他	准教授	カ'イ ジ'ン'イ 永井 純一 ＜令和7年4月＞		博士 (社会 学)													
19	その他	教授	コ'ヤマ ヤコ 越山 泰子 ＜令和7年4月＞		博士 (教育 学)													

教 員 の 氏 名 等																		
(グローバル学部グローバル学科)																		
調書 番号	教員 区分	職 位	氏 名 フリガナ ＜兼任（予定）年月＞	年 齢	保有 学位等	月 額 基本給 （千円）	担当授業科目の名称	主要授 業科目	配当 年次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 （兼任年分）	教育課程の編成等の意思決定に係る会議等への参画状況			申請に係る大学 等の職務に従事 する 週当たり平均日 数	申請に係る学部 等以外の組織 （他の大学等に 含まれる学部等 を含む）での基 幹教員としての基 勤 務 状 況	
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会 議等の名称		
20	その他	講師	ミヨシ テアキ 三好 徹明 ＜令和7年4月＞		修士 （人文学）		英語科教育法Ⅰ 英語科教育法Ⅱ 英語科教育法Ⅲ 英語科教育法Ⅳ		2春 2秋 3春 3秋	2 2 2 2	1 1 1 1	関西国際大学 教育学部 講師 （令3.4）					6日	
21	その他	教授	カタヤマ マリ 片山 真理 ＜令和7年4月＞		修士 （文学）		英語学 ニューオーブ・プログラムⅡ 通訳入門		2春 1春 2夏 3夏	2 2 2 2	1 1 1 1	関西国際大学 教育学部 教授 （平10.4）					6日	
22	その他	助教	ステレン ショアグロ Stelen E. Siagoo ＜令和7年4月＞		Master of Arts （フィジ ック）		英語コミュニケーションⅠ 英語コミュニケーションⅡ 英語コミュニケーションⅢ 上級英語コミュニケーションⅠ 上級英語コミュニケーションⅡ		1春 1秋 2春 2秋	1 1 1 1	1 1 1 1	関西国際大学 国際コミュニケーション学部助教 （平3.4）					6日	
23	その他	教授	シズキ カツヤ 清水 拓也 ＜令和7年4月＞		博士 （学 術）		中国語Ⅰ 中国語Ⅱ 地域研究（アジア圏）		1春 1秋 1春・秋	2 2 2	1 1 1	関西国際大学 国際コミュニケーション学部教授 （平27.4）					6日	
24	その他	准教授	シノハラ アツタ 南畑 淳史 ＜令和7年4月＞		博士 （工 学）		プログラミング入門		2秋	2	1	関西国際大学 社会学部 准教授 （令3.4）					6日	
25	その他	教授	シヨウ シカ 章 志華 ＜令和7年4月＞		博士 （情報 工学）		画像・動画編集 データサイエンス AIと次世代社会		2秋 1秋 1春・秋	2 2 2	1 1 1	関西国際大学 社会学部 教授 （令3.4）					6日	
26	その他	教授	チノ サツ 陳 那森 ＜令和7年4月＞		博士 （工 学）		ITスキル基礎		2秋	2	1	関西国際大学 社会学部 准教授 （令3.4）					6日	
27	その他	教授	ハサ アツタ 濱名 篤 ＜令和7年4月＞		博士 （社会 学）		人間学Ⅰ		1春・秋	0.6	1	関西国際大学 社会学部 教授 （平10.4）					6日	
28	その他	教授	ハサ ヨウコ 濱名 陽子 ＜令和7年4月＞		修士 （教育 学）		人間学Ⅰ 人間学Ⅱ		1春・秋 1春・秋	0.6 0.6	1 1	関西国際大学 教育学部 教授 （平10.4）					6日	

教 員 の 氏 名 等																		
(グローバル学部グローバル学科)																		
調書 番号	教員 区分	職 位	フリガナ 氏 名 ＜就任（予定）年月＞	年 齢	保有 学位等	月 額 基本給 （千円）	担当授業科目の名称	主要授 業科目	配当 年次	担 単 位 数	相 当 毎 講 数	現 職 （就任年月）	教育課程の編成等の意思決定に係る会議等への参画状況				申請に係る大学 等の職務に従事 する 週当たり平均日 数	申請に係る学部 等（他の大学等に 置かれる学部等 を含む）での基 幹教員としての 勤 務 状 況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会 議等の名称		
29	その他	教授	カミガミ アサミ 上村 和美 ＜令和7年4月＞		博士(言語文化学)		日本文化論		1春・秋	2	1	関西国際大学 経営学部 教授 (平10.4)					6日	
30	その他	教授	シズマ ミコ 清水 美知子 ＜令和7年4月＞		博士(社会学)		ジェンダーと多様性		1春・秋	2	1	関西国際大学 社会学部 教授 (平10.4)					6日	
31	その他	教授	ムラタ イチロ 村田 昌彦 ＜令和7年4月＞		工学士		地域防災減災論		2冬	2	1	関西国際大学 工学部 教授 (平28.4)					6日	
32	その他	教授	イノケ タカ 伊藤 尚子 ＜令和7年4月＞		修士(保健学)		グローバールヘルス		1冬	2	1	関西国際大学 保健医療学部 教授 (令3.4)					6日	
33	その他	教授	エンドウ ヤス 遠藤 泰生 ＜令和7年4月＞		文学修士		地域研究(北米圏)		1春・秋	2	1	関西国際大学 文学部 教授 (令3.4)					6日	
34	その他	准教授	オノキ ケイ 尾崎 慶太 ＜令和7年4月＞		修士(社会福祉学)		グローバールスタディⅡ		1夏	2	1	関西国際大学 教育学部 准教授 (平19.4)					6日	
35	その他	准教授	ヤマモト ヒロキ 山本 秀樹 ＜令和7年4月＞		修士(社会学)		グローバールスタディⅢ グローバールスタディⅣ		1夏 1夏	2 4	1 1	関西国際大学 社会学部 准教授 (平18.4)					6日	
36	その他	准教授	オノキ ケイ 行木 敬 ＜令和7年4月＞		修士(文学)		宗教と共生社会		1春・秋	2	1	関西国際大学 社会学部 准教授 (令2.4)					6日	
37	その他	講師	イノケ ヒロキ 池永 寛明 ＜令和8年4月＞		学士(経済学)		世界から見た日本		2春	2	1	関西国際大学 非常勤講師 (平8.4)						

教 員 の 氏 名 等																	
(グローバル学部グローバル学科)																	
調書 番号	教員 区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任（予定）年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 （千円）	担当授業科目の名称	主要授 業科目	配当 年次	担 単 位 数	年 間 講 義	現 職 （就任年月）	教育課程の編成等の意思決定に係る会議等への参画状況			申請に係る大学 等の職務に従事 する 週当たり平均日 数	申請に係る学部 等以外の組織 （他の大学等に 置かれる学部等 を含む）での基 幹教員としての状 況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会 議等の名称	
48	その他	講師	オカリ ケイリ 小川 佐由理 ＜令和7年4月＞		文学士		日本語Ⅳ アカデミック日本語Ⅰ アカデミック日本語Ⅱ		1春・秋 2春 2秋	1 1 1	2 1 1	関西国際大学 非常勤講師 （令和2.4）					
49	その他	講師	カサカ ジュン 上 仲 淳 ＜令和7年4月＞		博士 （言語 文化 学）		日本語Ⅴ		1春・秋	1	2	関西国際大学 非常勤講師 （平成29.4）					
50	その他	講師	ワカガ コウヘイ 和久田 耕平 ＜令和7年4月＞		修士 （学校 教育 学）		リーダーシップ演習		1冬	1	1	関西国際大学 非常勤講師 （令和5.4）					
51	その他	講師	デジマ ヨウタ 出嶋 陽介 ＜令和7年4月＞		修士 （法 学）		日本国憲法 人権と法		1春・秋 1春・秋	2 2	1 1	関西国際大学 非常勤講師 （令和3.4）					
52	その他	講師	オカダ ヨウタ 岡田 悠法 ＜令和7年4月＞		修士（人 間・環 境学）		倫理と社会生活		1春・秋	2	1	関西国際大学 非常勤講師 （令和5.4）					
53	その他	講師	イシイ ダイスケ 石井 大輔 ＜令和7年4月＞		博士（学 術）		近現代の歴史		1春・秋	2	1	関西国際大学 非常勤講師 （令和5.4）					
54	その他	講師	イシノ マサキ 飯嶋 香織 ＜令和7年4月＞		修士 （教育 学）		教育と人間形成		1春・秋	2	1	関西国際大学 非常勤講師 （令和5.4）					
55	その他	講師	ハシモト カツ 橋本 登史 ＜令和7年4月＞		博士 （学 術）		食と健康		1春・秋	2	1	関西国際大学 非常勤講師					
56	その他	講師	ムライ カツヤ 村井 琢哉 ＜令和7年4月＞		修士 （人間 学）		ボランティア論		1春・秋	2	1	関西国際大学 非常勤講師 （令和5.4）					